

岡山大学構内遺跡調査研究年報 6

1988年度

1989年10月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡調査研究年報 6

1988年度

1989年10月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターは前身である埋蔵文化財調査室を含めると6年半、大学の正規の機関のセンターに改組されて2年を迎えることになります。学齢に達するまでに賜りました全学の深い御理解と御援助に対して、深甚の感謝を申し上げますと共に、今後の調査研究活動に対しまして、更なる御理解と御支援をお願い申し上げる次第であります。

ここに収録しましたものは、本センターが1988年度において行いました岡山大学津島キャンパスの3つの構内遺跡、すなわち、大学院自然科学研究科棟・工学部情報工学科校舎・工学部生物応用工学科校舎の建物新宮に伴う遺跡の調査結果を中心に、本センターの同年度におけます活動の経過報告をまとめたものであります。

発掘された遺跡の調査研究の結果につきましては、共有の遺産として速やかに報告書として詳細に公表することが当然であります。整理には時間を要することも事実であります。年報は本報告書に先立って、こうした要請に応えるための処置でもあることを御理解頂きたいと思っております。

最後になりましたが、本センターの調査研究に際しましては、直接・間接に御協力・御指導を賜りました岡山県教育委員会文化課・岡山県総務部県史編纂室・岡山市教育委員会文化課・岡山大学文学部考古学研究室をはじめ関係機関、関係各位に厚く御礼を申し上げます。

1989年10月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

高 重 進

例 言

- 1 本年報は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（旧岡山大学埋蔵文化財調査室）が岡山大学構内において1988年4月1日から1989年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存、および活動成果をまとめたものである。
- 2 大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては、設定基準を次のように定めた。
 - 1) 津島地区では、国上座標第5座標系（ $X = -144,500$, $Y = -37,000$ ）を起点とし、真北を基軸とした構内座標を設置した。一辺50mの方形地区割である。また、同地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と同南地区に二分する（図版1～3）。
 - 2) 鹿田地区では、国上座標第5座標系（ $X = -149,800$, $Y = -37,400$ ）を起点とし、座標軸を $N 15^{\circ} E$ に振ったものを基軸とした構内座標を設置した。地区割は一辺5mの方形を用いている。（図版4）。
 - 3) 本文中で用いる方位は津島地区・鹿田地区ともに真北を使用している。
- 3 岡山大学構内および関連施設内の名称は、農学部旧演習林内に分布する古墳群などの周知の遺跡の場合はそのまま踏襲し、津島地区構内で新たに発見された遺跡は、遺存する小字名を用いるか、岡山大学津島地区遺跡群と仮称して、地点ごとに任意の記号をもって示している。また、鹿田地区では全域において、これまで称されてきた「鹿田遺跡」を用いている。
- 4 表に記載した所属部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
- 5 本文・目次・挿図・図版などで使用の調査番号は表1と一致する。
- 6 遺物観察表の胎土は微砂：0.5mm以下、細砂：0.5～1.0mm、粗砂：1.0～2.0mm、細礫：2.0mm以上を指す。
- 7 遺構実測は入倉徳裕・絹川一徳・高橋進・竹内浩・土井基司・中塚孝信・福田真久・藤原千鶴・前原伸也・安井宣也・若林卓が行い、遺構・遺物の浄写は各報告者が担当した。
- 8 本文は第1・3・4章を山本悦世が執筆し、第2章を石坂俊郎・絹川・土井・藤原・安井・山本・若林が分担した。執筆者名は末尾に記した。
- 9 調査・研究活動は近藤義郎前センター長、編集は高重進センター長・新納泉室長の指導のもとに山本が担当した。
- 10 本年報に掲載の津島地区の地形図は岡山市発行の1/2500の地図を複製したものである。
- 11 調査・整理において以下の方々にご援助・教示を頂いた。記して感謝申し上げる。
栗谷彰、稲田孝司、扇崎由、五味田裕、高橋学、千葉喬三、千葉豊、時枝克安、根木修、平井勝、古野勝志、岡山裕、村上幸雄

岡山大学構内遺跡調査研究年報6 1988年度

目 次

第1章	岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項	1
1	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定	1
2	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規定	2
3	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規定	4
第2章	1988年度岡山大学構内遺跡調査報告	7
1	調査の概要	7
2	発掘調査	9
	① 大学院自然科学研究科棟新営に伴う発掘調査	9
	② 工学部生物応用工学科校舎新営に伴う発掘調査	16
	③ 工学部情報工学科校舎新営に伴う発掘調査	18
3	試掘調査	24
	① 工学部校舎予定地	24
	② 農学部動物実験施設及び薬学部遺伝子実験施設予定地	27
	③ 国際交流会館予定地	29
4	立会調査	30
	(1) 津島地区	30
	(2) 鹿田地区	30
5	その他の活動	30
	(1) 鹿田地区建物配置状況の平板測量	30
	(2) 科学的保存処理	31
第3章	1988年度普及・研究・資料整理活動	34
1	資料整理	34
2	刊行物	34
3	調査員の活動	34
4	日誌抄	36
5	遺物収蔵量および保管施設	37
第4章	1988年度構内遺跡の調査および活動のまとめ	39

附表	40
附編 竖穴系横口式石室小考	45

挿 図 目 次

図1 大学院自然科学研究科棟予定地 土層柱状図	10
図2 遺構全体図	13
図3 出土遺物	14
図4 工学部生物応用工学科校舎予定地 土層柱状図	17
図5 6層上面遺構検出状況	17
図6 工学部情報工学科校舎予定地 土層柱状図	19
図7 遺構全体図	20
図8 13層上面遺構検出状況	21
図9 出土遺物	21
図10 1号炉 平・断面図	22
図11 工学部校舎予定地 試掘調査地点図	24
図12 土層柱状図	25
図13 出土遺物	26
図14 農・薬学部実験施設予定地 試掘調査地点図	27
図15 土層断面図	27
図16 遺構検出状況	28
図17 出土遺物	28
図18 国際交流会館予定地 試掘調査地点図・土層柱状図	29
図19 立会調査② 土層柱状図	30

表 目 次

表 1	1988年度調査一覧	7
表 2	大学院自然科学研究科棟出土遺物観察表	15
表 3	尚ウレタン比較表	33
表 4	埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要	38
附表 1	1982年度以前の構内主要調査 (1980～1982年度)	40
附表 2	1987年度以前の構内主要調査 (1983～1987年度)	40
附表 2-(1)	発掘調査	40
附表 2-(2)	試掘調査	41
附表 2-(3)	立会調査	42
附表 3	埋蔵文化財調査全室刊行物	44
附表 4	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	44

図 版 目 次

図版 1	津島地区全体図
図版 2	津島北地区
図版 3	津島南地区
図版 4	鹿田地区全体図
図版 5	津島地区 (大学院自然科学研究科棟予定地発掘調査)
	1 7層上面弥生時代水田検出状況 (気球写真 上が北)
	2 8層上面西半部弥生時代水田検出状況 (西から)
図版 6	津島地区 (大学院自然科学研究科棟予定地発掘調査)
	1 縄文時代後期貯蔵穴群検出状況 (東から)
	2 貯蔵穴 2 (東から)

- 図版7 津島地区 (大学院自然科学研究科棟予定地発掘調査)
- 1 野蔵穴1 (北から)
 - 2 出土遺物
- 図版8 津島地区 (工学部生物応用工学科校舎予定地発掘調査)
- 1 古代溝究掘状況 (東から)
 - 2 古代溝杭出土状況 (北から)
 - 3 古代溝木器出土状況 (西から)
- 図版9 津島地区 (工学部情報工学科校舎予定地発掘調査)
- 1 9層上面水田遺構検出状況 (南から)
 - 2 10層上面水田遺構検出状況 (東から)
- 図版10 津島地区 (工学部情報工学科校舎予定地発掘調査)
- 1 11層上面弥生時代水田検出状況 (南から)
 - 2 1号炉址 (北から)
- 図版11 津島地区 (工学部情報工学科校舎予定地発掘調査)
- 1 13層上面縄文時代遺構検出状況 (調査区東側, 北から)
 - 2 13層上面縄文時代遺構検出状況 (調査区西側, 北から)

第1章 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

(設 置)

第1条 岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

(目 的)

第2条 センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

(センター長)

第3条 センターにセンター長を置く。

- 2 センター長は、専門的知識を有する本学の教授の内から学長が命ずる。
- 3 センター長は、センターに関する業務を掌理する。
- 4 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第4条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

- 2 調査研究室に室長、調査研究員及びその必要な職員を置く。
- 3 室長は、専門的知識を有する本学の教官の内から学長が命ずる。
- 4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。
- 5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

- 2 専門委員は、本学の教官のうちから学長が命ずる。
- 3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理委員会)

第6条 本学に、センターの管理運営の基本方針を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

2 管理委員会に関する規程は、別に定める。

(運営委員会)

第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関する規程は、別に定める。

(事務)

第8条 センターの事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2 この規程施行後最初に任命されるセンター長、室長及び専門委員の任期は、第3条第4項、第4条第5項及び第5条第3項の規程にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図るため、学内施設として、新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第6条第2項の規程に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 管理委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

(組 織)

第3条 管理委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 学長
- 二 各学部長及び教養部長
- 三 自然科学研究科長
- 四 資源生物研究所長
- 五 附属図書館長
- 六 各附属病院長
- 七 地球内部研究センター長
- 八 学生部長
- 九 医療技術短期大学部主事
- 十 事務局長
- 十一埋蔵文化財調査研究センター長

(委員長)

第4条 管理委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、管理委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(幹事)

第6条 管理委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(庶務)

第7条 管理委員会の庶務は、施設部企画課に置いて処理する。

附 則

この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するために置く岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に関し、必要な事項を定めるため。

(管理委員会委員)

学 長	高橋 克明	教養部長	石井 旭
文学部長	坪井 清彦	自然科学研究科長	小合 龍夫
教育学部長	秋山 和夫	資源生物研究所長	河崎 利夫

法学部長	上野 雅和	附属図書館長	佐藤 二郎
経済学部長	土生 芳人	医学部附属病院長	田邊 剛造
理学部長	富島 康雄	歯学部附属病院長	井上 清
医学部長	金政 泰弘	地球内部研究センター長	松井 義人
歯学部長	加藤慶二郎	学生部長	坂田 洸
薬学部長	大和 正利	医療技術短期大学部主事	喜多嶋康一
工学部長	鳥居 滋	事務局長	城倉 英人
農学部長	長堀 金造	埋文調査研究センター長	近藤 義郎

幹 事

庶務部長	川崎 晃	経理部長	倉部 隆司
施設部長	上村 保人		

3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第7条第2項に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組 織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 本学の教授のうちから学長が命じたもの若干名
- 三 センターの調査研究専門委員から学長が命じたもの1人
- 四 センターの調査研究室長
- 五 施設部長

2 前項第2号の任期は、1年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を召集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(庶務)

第6条 運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

- 1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。
- 2 この規程施行後最初に任命される第3条第1項第2号の委員の任期は、同条第2項の規程にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に関し、必要な事項を定めるため。

(運営委員会委員)

文学部教授	近藤 義郎 (センター長)	歯学部教授	小田嶋栢郎 (調査研究専門委員)
工学部教授	本田 和男 (管理委員会委員)	文学部助手	山本 悦世 (調査研究室長)
医学部教授	中山 沃	施設部長	上村 保人
教養部教授	定兼 範明		

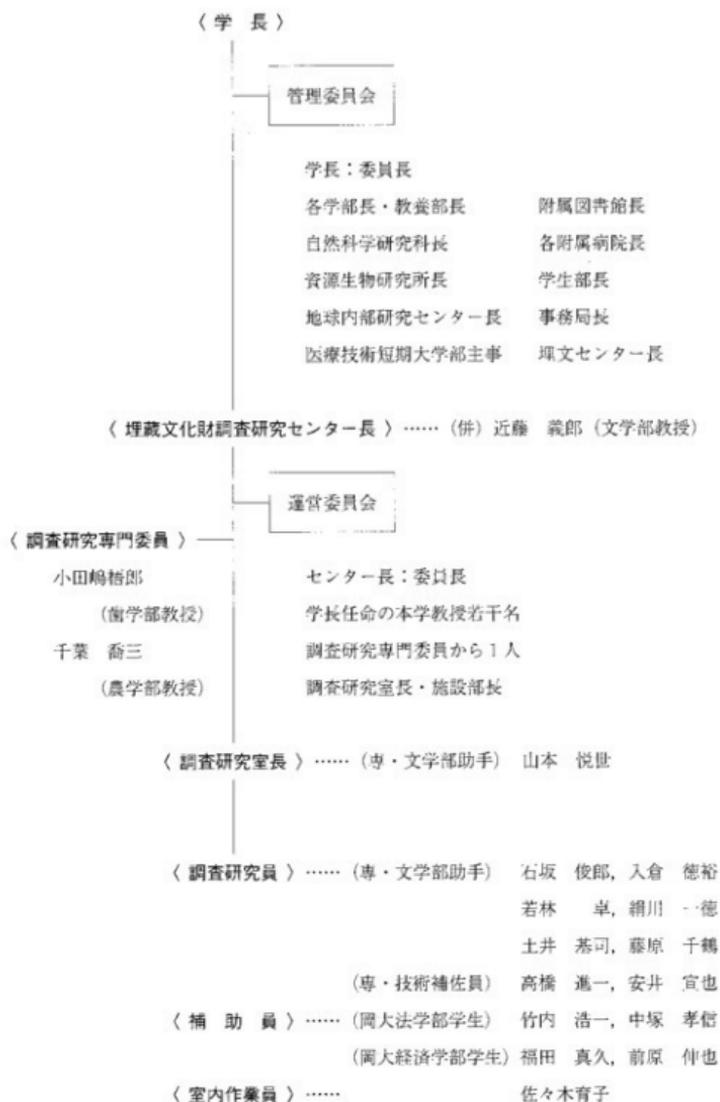
運営委員会審議事項

1988年5月13日	1987年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
	1988年度 〃 予算について
1989年1月27日	センター長などの選出について
	1988年度発掘調査の中間報告
1989年3月1日	センター長などの選出について
	1988年度発掘調査期間の延長について

管理委員会審議事項

1988年5月25日	1987年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
	1988年度 〃 予算について
1989年3月22日	埋蔵文化財調査研究センター長などの選出について
	1988年度発掘調査に関する報告

センター組織一覧



第2章 1988年度岡山大学構内遺跡調査報告

1 調査の概要

当センターにおいては、大学構内における掘削工事に際して、事務局施設部企画課を通じて行政的手続きを行った上で、発掘・試掘・立会調査にわけて調査を実施している。

現在までのところ、その調査対象は津島地区と鹿田地区が中心となっている。特に、鹿田地区は周知の遺跡（鹿田遺跡）に指定されており、全ての掘削工事に対して届出を提出した上で対応を行っている。また、津島地区においても新たな遺跡の確認が進んでいることから、届出の有無にかかわらず、少なくとも立会調査を行っている。

1988年度は発掘調査3件（津島地区）、試掘調査3件（津島地区）、立会調査29件（津島地区15件・鹿田地区14件）を実施した。詳細は表1に挙げた（表1・図版1～4）。（山本）

表1 1988年度調査一覧

番号	種類	所属	調査名称	調査地区	調査期間	掘削深度 (m)	備 考
①	発掘	大	自然科学研究科棟	津島北 AY 06-08 AZ 06-07	6.27～ 1989.3.19	1.5～5.0	調査面積1557㎡ 縄文後・晩期の貯蔵穴と河沿 跡主～近世の木田址
②	*	工	生物応用工学科校舎	* AV-AW 04-05	9.20～ 1989.3.31	1.8～3.5	調査面積600㎡ 縄文後・晩期の貯蔵穴と河沿 跡主～近世の溝と水田址
③	*	*	情報工学科校舎	* AV-AW 05-06	10.12～ 1989.3.31	2.2	調査面積800㎡ 縄文後・晩期集落址 跡主～近世水田址
④	試掘	*	校舎	* AV-AX 04-06 * AW 04	4.11～5.12 8.8～8.11	2.0～3.5 2.0	黒色土を標高3m弱で確認 溝状遺構・水田址検出 縄文～近世土器出土 (1988年度発掘調査)
⑤	*	農 業	動物実験飼育施設 及び遺伝子実験施設	津島南 RD 18-19	5.23～5.27	2.3	黒色土を標高約2.3mで確認 溝状遺構・縄文～中世遺物検 出 造成±1.1～1.2m
⑥	*	学	国際交流会館	* BC 29	6.6～6.10	2.5	近世・中世の遺物出土 造成土約1.2m (1988年度工事立会)
⑦	立会	情七	情報処理センター送信機付設	津島北 AY 11-AZ 11	4.2	1.2	造成±0.8～0.85m
⑧	*	医務	管理棟新舎に伴う電柱架設	鹿 田 AE 41, AJ-AO 43 AU 40	4.11	1.6	造成土は0.6m～1.4m
⑨	*	学	上生宿舍H2燃料ガス配管改修	津 島 AQ 02	4.22	0.5～0.7	既設管内
⑩	*	大	大学院新舎に伴う電柱架設	津島北 AZ 06	6.18	2.3	造成土0.8m
⑪	*	医務	病棟用空調室蒸気配管改修	鹿 田 BY 29-30	6.28	0.4	既設管内

番号	種類	所属	調査名称	調査地区	調査期別	掘削深さ (m)	備 考
㉑	立会	医病	給食室蒸気配管改修	廣 用 RM 12	6.30	0.6	蒸気管内
㉒	*	医	動物実験施設北排水管改修	* CC 63-65	7.11	1.0-1.1	*
㉓	*	医病	看護婦宿舎ケラー用電源取設	* CV 35-40, C140	7.12	0.6-0.8	造成土内
㉔	*	工	校舎新営に伴う樹木移植	津島北 AV 05-06 AU 07	8.30-31	0.3-0.9 0.9	*
㉕	*	医病	職員兼会所給水管改修	廣 用 DD 30-36, DF 29-30-36 DF 38-30	9.8-9	0.3-0.5	*
㉖	*	教養	テニスコート夜間照明施設	津島南 8B・8G 10-11	9.10-13-16 19-21-22-29 10.3-4	2.2 1.4-1.5 0.4-0.7	灰色土を表上下約2mで確認 西に向かう落ちが確認される 造成土 1.5m
㉗	*	事	国際交流会館 樹木移植	* BC 25-26 BD 26	10.3-5	0.5-0.6 0.2-0.5	造成土内 *
㉘	*	*	* 本体部分	* BC 26	10.11 10.31 -11.2-4	1.0 2.4-2.9	造成土 1.5m
㉙	*	*	* 電柱架設	* BB 25-26	10.11	1.7-1.9	* 1m, 以下は灰色粘土
㉚	*	*	* 屋外ガス	津島南 BR-BC 26	2.25-3.2	0.9	造成土内
㉛	*	*	* 環境整備	* BU-RD 26-27	2.27 3.14-18	0.2 1.5	造成土・機内
㉜	*	*	* 国際交流会館 合併処理槽	* BB 26	11.11 11.28-30	1.0 2.2	造成土内 造成土 1.3m
㉝	*	*	* 樹木移植	* *	11.12	0.5	造成土内
㉞	*	医	玄園付近外筒設置	廣 用 AQ-BA 53 AY 47	10.11-13	0.4 1.0-1.3	*
㉟	*	*	* 配線	* AR-AW50, AY47 AW 48-49 AX 47-48	10.12-13	0.5-0.6	*
㊱	*	理文	収蔵庫新営基礎	津島北 AU 11	10.15	0.4-0.5	*
㊲	*	医病	旧管理棟北側ガス管理設	廣 用 AS 03-09	10.24-25	0.7-0.8	*
㊳	*	*	外米庫東通路土留壁延長整備	* AH-AS 22	10.26-31	0.2-0.7	*
㊴	*	医	記念会館南・R研究センター 東側駐輪場基礎	* BL 47-51 BS・BT 46-48	11.10-12	0.2-0.7	*
㊵	*	事	土生総合自転車廣場改修	津 島 AQ-AR 02	12.6-7	0.4	*
㊶	*	工	機械工学科・精密応用科学科 実験棟電気改修	津島北 AU 09-10	2.1-10	0.5-0.6 1.4-1.6	*
㊷	*	医病	動物実験施設東通路整備	廣 用 CR-CK 55, CU 54 CH-CK 56, CX 57	3.16-28	0.2, 0.9	造成土内
㊸	*	医	ボイラー室副道通路整備	* BE-BL 65 BE 66-68	3.20-29	0.3, 0.7 0.95	*
㊹	*	医病	管理棟新営に伴う排水・舗装	* AZ 41-42, RA 39 RE-RC 35, BU 40	3.29-31	0.5 1.5	* 造成土・機内

2 発掘調査

本年度は津島地区構内において、3件の発掘調査を行った。大学院自然科学研究科棟新営に伴うもの、工学部生物応用工学科校舎および情報工学科校舎新営に伴うものである。いずれも、津島北地区の中でも北東部に位置し、相互間距離は約80～150mと近接している。そのため、その内容も非常に関連深い結果となった。特に、縄文～弥生前期にかけての資料は注目される。

① 大学院自然科学研究科棟新営に伴う発掘調査（津島北地区 A Y06～08, A Z06・07区）

調査の経過

自然科学系の総合大学院設置に伴い、建物予定地の教育学部西側の木造建物の中央広場を中心に、一昨年度（1986年度）、試掘調査を行った。その調査結果から谷状部と判断された北半部に建物の建設が決定し、調査面積1537㎡を1988年6月27日から調査員4名で発掘を開始した。

発掘開始後、弥生時代層の調査に入った段階（地表下約1.5m）で、当初予定していた調査終了面以下の状況確認のために、調査区内の各地点に深掘りを行った。その結果、調査区北端において河道の立ち上がりか認められ、縄文時代後期の遺構・遺物が確認された。また、それに加えて、地表下約4mの砂礫層からも同時期の遺物が出土することが判明した。そこで、最も効果的な調査方法を検討した結果、縄文時代の遺構・遺物については存在地域が限定的であること、当初予定の調査終了面からその遺物包含層まではほとんど遺物を含まない層が厚く堆積している（場所によっては1m以上）ことなどの点を考慮に入れ、当初予定した面までは全面発掘を行い、それ以下については地域を限定して発掘調査を行うこととした。また、地表下4m以下の遺物については河道内の流れ込みのものであること、地表から非常に深いため調査に危険が伴うことなどから、部分的発掘を含めて調査終了後、機械で砂礫層までの土層を除去した上で、1989年3月8日から12日間にわたって、遺物の取り上げを行った。調査終了は3月19日である。また、縄文時代遺構を中心に現地説明会を1989年2月18日に開催した。（山本）

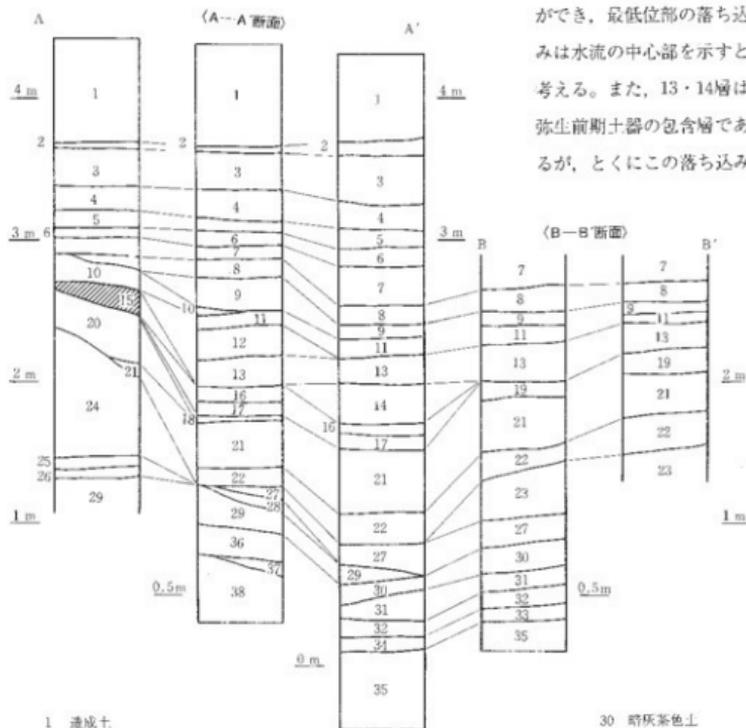
層序と地形（図1・2）

現地表は標高4.5～4.3mを測る。1層は1907年の陸軍屯営地建設に伴う造成土である。2層は造成直前の近代耕作土である。以下3層から10層まで、出土遺物が細片のため正確な時期比定は難しいが、およそ、3層は近世、4層は中世、6層は古代、7層は弥生時代後期、8～10層は弥生時代中期から前期の堆積層と考えている。以上の各層の内、3・4・7層は細分が可能である。なお、古墳時代層は確認されなかった。

7層は、きわめて緩やかではあるが、東南東から西北西の方向に走る谷状の地形を形成している。この谷状地形は縄文時代後期から弥生時代前期にかけての自然河道の名残りで、11層以

下の各層は河道埋積土と微高地形成土とに大別される。11・12層は暗褐色砂質土で、弥生前期土器が比較的多く出土した。13層は基本的に灰褐色粘質土であるが、ラミナ状に砂層を挟み、14層は砂と粘土の細かな互層を成している。さらに、図1では表現していないが、13・14層の最低位部に粗砂を埋土とする谷状の落ち込みが走る。以上の状況から、13・14層は流水

に伴う堆積層と見なすことができ、最低位部の落ち込みは水流の中心部を示すと考える。また、13・14層は弥生前期土器の包含層であるが、とくにこの落ち込み



- 3 : 近世, 4 : 中世, 6 : 古代, 7~10 : 弥生, 11~14 : 弥生前期 (低), 15 : 縄文晩期-弥生前期 (高)
16~22 : 縄文後-晩期 (低), 23・24 : 縄文後期 (高), 27~35 : 縄文後期 (低)

図1 土層柱状図 (縮尺1/40)

から多く出土した。15層は、本調査区内では斜面部に若干存在するにすぎないが、弥生時代前期以前の形成とされ、津島地区・川に分布する黒色土に対応する可能性がある。

16～22層は河道内に堆積した灰色～黒色の粘土層である。17層は多量の泥炭を含む。18層は16・17層と共に縄文時代晩期上器（突帯文土器）を出土する層で、河道南斜面に堆積している。21層上面でごく僅かの突帯文土器を検出したほか、21・22層からは遺物は出土していないが、上下層との関係より、両層は縄文時代後期～晩期の堆積層とみなされる。

23層は河道北側に微高地を形成すると思われる均質な砂層で、その直上から縄文時代後期後半の遺物が多量に出土した。遺物は北側より流れてきたような状態を示していた。24層は均質な砂の厚い堆積で、河道南側の微高地を構成している。上面から縄文土器が僅かに出土したが、基本的に無遺物である。

27層は木質を多く含む茶褐色土、28層は縄文時代後期後半の遺物を多量に包含する砂礫層で、29層は無遺物の砂礫層である。いずれも縄文後期の河道埋土と思われる。30層以下は調査区の一部を深掘することによって確認した層であり、調査区南端付近と北半では堆積の様相が異なっている。南端付近では砂礫の厚い堆積がみられる（36～38層）が、北半では、茶褐色土・粗砂・砂礫が各々厚さ10～20cmの互層状に堆積し（30～34層）、茶褐色土上の厚い堆積がその下へ続く（35層）。31層で縄文後期前半の上器を検出したほか遺物の出土をみていない。以上の状況により、30～35層は縄文時代後期以前の河道の埋土と思われるが、36～38層はそうでない可能性もあろう。しかし、一部深掘による確認であるため、両者の関係は掴みきれなかった。

ここで、縄文時代後期から古代にかけての旧地形の変遷を概観してみる。縄文時代後期には調査区の東南東から西北西へ河道が走っており、その西側に微高地が形成されていた。河道部分は、晩期を通して水流が停滞し、低湿地的状態を呈していたと思われるが、弥生時代に入って再び水流が活発となり、埋積が急速に進む。そして、自然流路としてのこの河道は弥生前期中には埋没したと推定する。河道の名残りの低地は、以後徐々に埋積され、古代には、調査区はほぼ水平堆積となる。

調査の結果（図2・3、図版5～7）

本調査区における中世以降の遺構としては、溝1条・土壇6基が挙げられる。2層上面で検出した調査区北辺を東西に走る溝は、確認した限り近世以降の開掘であるが、条里制施行段階の坪境を踏襲している可能性がある。土壇6基のうち5基は近世に属し、1基は中世に属する。近世の土壇は調査区北西部に密集して存在していた。

本調査区内では、土層の性状から、弥生時代以来連綿と水田耕作が行われていたと推定し得るが、畦畔を良好な形で検出したのは、弥生時代に属する7層および8層上面においてである。

前述したように、当時は東南東から西北西へやや蛇行して走る谷状の地形を成していた。7層、8層いずれの水田も、等高線に平行する畦畔に、それと直交する畦畔を結合して区画している。畦畔の結合は基本的に十字で、T字状に結合する例は少ない。水田一区画の形状は方形を基本とするが、その規模にばらつきがみられる。ただし、地形の傾斜が急な箇所位置する区画は小さく、その等高線に直交する辺は短いという傾向が認められる。水田の造営時期は、7層上面水田は弥生時代後期で、8層上面水田は中期後葉に遡る可能性も考えられる。

なお、7層上面では、調査区南西隅において、等高線に沿う土手状の高まりを確認した。また、その南側にこれと平行して走る溝1条が検出された。土手より南では7層が存在せず、溝の検出面は24層上面となるが、埴土に混入した土器や層序から、溝は弥生時代後期以後の造成と考えられる。土手状高まりは何等かの意味でその両側を囲する施設の痕跡である可能性が考えられようが、南側の溝も含め、水田と関連するかどうか、その確証を掴むことはできなかった。

以上、弥生水田に関しては、畦畔を検出することができたが、それと並存したであろう水利施設の明確な遺構は確認されなかった。

弥生時代の遺物としては、後期に属する7層から安山岩の石鏃・剣片・破片が、南半に集中して出土した。また、11・12層では、前期土器が各個体ごとにまとまったような状態で、比較的数多く出土しており、これも南側に集中する傾向をみせる。調査区南方の微高地上に該期の集落が展開していた可能性を指摘できよう。11～14層出土の前期土器は、ともに前期後半に位置づけられる。確実に前期前半に遡るものはない。壺形土器は頸部下や肩部に横位の沈線を3ないし4条巡らす。最上位沈線の上側および最下位沈線の下側を、削りあるいはなでによって低め、沈線施文部位を突出させるように強調したものが認められる。甕形土器は、口唇に刻み目を施すものとそうでないものがあり、どちらも口縁部下に2・3条の沈線を巡らせるが、削り出し段を形成するものもある。

縄文時代の遺構は貯蔵穴10基がある。河道南縁の18層下面で検出した3基は晩期に属する。貯蔵穴8は径約120cmの円形で、深さは約55cmを測る。掘り方は底部が広がるフラスコ状をなす。底面にはドングリが僅かながら残存していた。フラスコ状の掘り方は3基に共通する。貯蔵穴内からの出土土器は少ないが、埋没状況から晩期後半の造営と考えられる。

23層上面で検出した7基の貯蔵穴は後期に属し、いずれも河道北縁沿いに位置している。貯蔵穴1は、平面が径110cmほどの円形を呈すと思われる、断面はJ字型をなす。深さは約60cmを測る。最下層はドングリ・木質を僅かに含む茶褐色粘質土層で、その上面でドングリが入った完形の深鉢形土器（彦崎KⅡ式）と半欠けの鉢形土器が検出された（図3）。さらに間層を挟んで、ドングリ・木枝・炭化物を多く包含する茶褐色粘質土層が認められた。貯蔵穴2は、径120cm程度と思われる平面円形、断面J字形の掘り方をもつ。深さは約55cmを測る。ドングリ

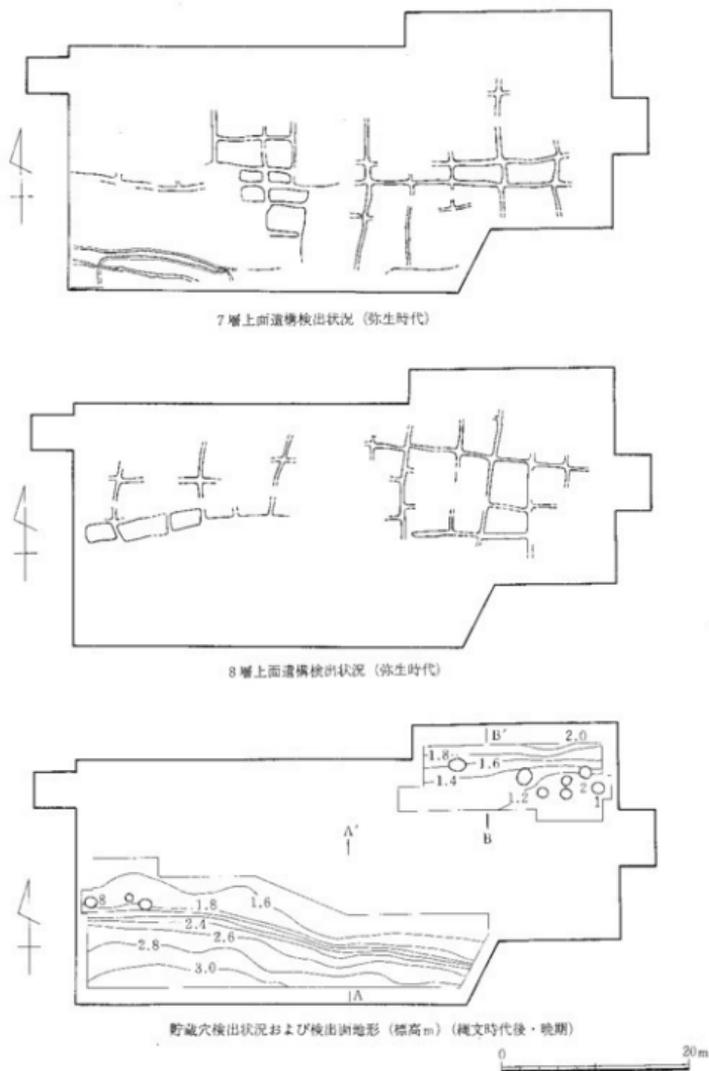


図2 遺構全体図（縮尺1/600）

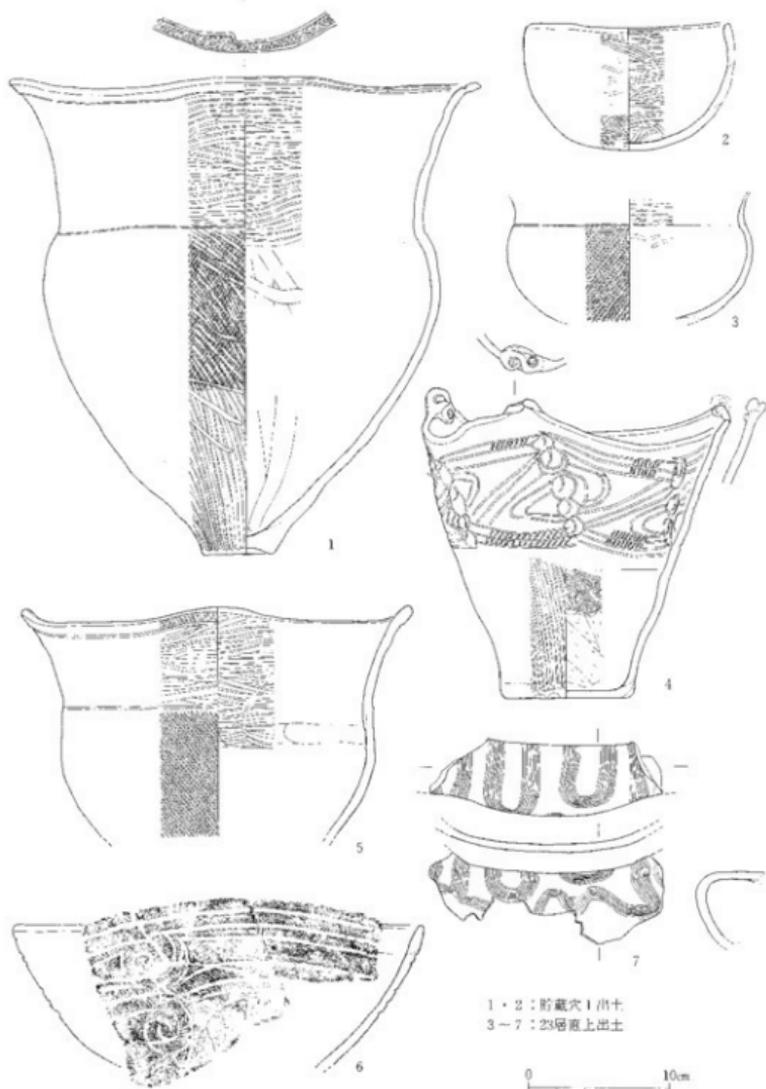


図3 出土遺物 (縮尺1/4)

を僅かに含む最下層の直上に、ほぼドングリのみで構成される層が15cm程の厚さをもって存在していた。この層のドングリは土圧で潰れたような様相を示し、それに混じって赤漆塗りの木製櫛が1点検出された。他の貯蔵穴においても、埴土下部には、茶褐色粘質土あるいは灰色砂中に、ドングリ・木葉・小枝が含まれた状態で検出されている。

後期貯蔵穴掘り込み面の直上、23層と22層の境には、南北2.5m、東西13m以上の範囲にわたって、縄文後期土器を主体とする遺物の集積がみられた。土器は瀬戸内地方で後期後半にあたる彦崎KⅡ式である(図3)。土器のほか石鏃・石鋸などの石器も出土している。特筆すべきものとしては、この時期、瀬戸内地方ではほとんど出土例の知られていない耳栓がある。これらの遺物の一部が貯蔵穴の埴土上部に流れ込んでいる状況が認められた。また、貯蔵穴1の内部から出土した深鉢が同型式であることや28層の存在からしても、23層上面検出貯蔵穴の造営時期は後期後半彦崎KⅡ式期に求められよう。

河道内に堆積した28層も後期の遺物を多量に包含していた。土器は彦崎KⅡ式であるが、古い要素をもつものが口立つ。その他、石器が数多く出土しており、耳栓1点も確認している。

これら縄文時代後期後半の遺物の保存状態は良好で、磨滅が少なく割れ口もシャープである。その集中する出土状態と併せ、当該期の集落が調査区に近在していた可能性は高いと言えよう。

(若林)

表2 出土遺物観察表

番号	器 種	法 量 (cm)				形態・手法の特徴ほか	色 調	伊 土
		口径	口径	底径	高さ			
1	深 鉢	32.2	28.0	5.0	33.5	内面・外面・底面境界付近に流線が落ち、口縁部直下の部に縄文(LⅡ)流文。口縁部が内・外面縁ミガキ、胴部との境界にわずかな段を振り出す。下部外面上部に縄文(LⅡ)流線が全面にわたるミガキ、内面底辺工具によるケズリ痕ナデ、底辺ナデ、外面スス付着	赭灰褐色	黒砂多量
2	鉢	(14.8)	-	-	9.0	口縁部やや内面縁ミガキに面取り。胴部内・外面縁ミガキ、底辺内・外面ミガキ	(外)赤褐色 (内)灰褐色	黒砂・黒砂多量
3	+	-	17.3	-	-	遺物外面ナデ、内面縁ミガキ、外面縁ミガキとの境界にわずかな段を振り出す。胴部外面縄文(LⅡ)流文。内面ナデ、底辺の断面痕あり	赤褐色	黒砂少量、 黄砂多量
4	深 鉢	21.7	-	9.5	22.0	外面縁ミガキ後流線と縄文(LⅡ)による文様等、内面全体を板状工具によるケズリ、その後1半のみナデ、胴部との境界部縁取りえ、底辺外ナデ・内面厚肉不揃い	赤褐色	黒砂多量
5	+	(27.6)	(22.2)	-	-	口縁・胴部内外面縁ミガキ、胴部との境界外面にわずかな段を振り出す。当口には縄文(外)赤褐色(内)黒褐色	(外)赤褐色 (内)黒褐色	黒砂多量
6	浅 鉢	(28.0)	-	-	-	胴部外面縁と縄文(LⅡ)による流文。内面下等ナデ	赭灰褐色	黒砂多量
7	深 鉢	-	-	-	-	粘土質を由りて成形。上部縁部に断面痕がみられる。外面下等ナデ、内面縁ミガキ。口縁部は3本1単位。流線に一部赤色流線あり	赤褐色	黒砂多量

測定値()内数字は測定状況による推定値

② 工学部生物応用工学科校舎新営に伴う発掘調査（津島北地区 AV・AW04・05区）

調査の経過

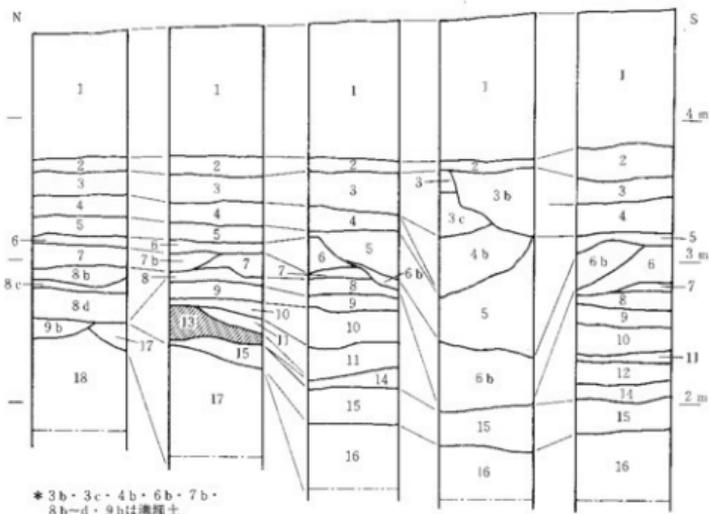
工学部生物応用工学科校舎新営にあたり、1988年4月から5月に予定地内において試掘調査を行い、弥生時代前期～近世の遺跡の存在が確認された。その結果、同年9月20日に発掘を開始し、3月末日を終了予定とした。しかし、調査開始後、試掘調査では確認されなかった縄文時代の遺構・遺物の存在が判明したため、調査期間を延長して5月末日までとした。調査地点は、津島北地区工学部土木工学科校舎と馬場の間に位置する。発掘面積は約600㎡である。なお、本年度未現在、11・13層上面（弥生時代前期）までが終了している。^(註2)

層序（図4）

現地表は標高4.6～4.8mを測る。1層は1907年の陸軍屯営地建設に伴う造成土で、2層はその直下の近代耕作土である。3～4層については、いずれも遺物が細片で量も少ないので、現在のところ正確な年代比定はできないが、おおまかに3層は近世、4層は中世の耕作土と考えている。5層は古代の終わりごろから中世にかけての洪水砂とみられる。6～8層は溝中の土器から、6層が9～10世紀、7層が6世紀末から7世紀前半、8層が弥生時代後期～古遺時代前期の耕作土と推測される。9～10層は遺物等での確定はできないが、上下層との関係などから弥生時代中期頃と考えられる。11層以下については、上述のように調査中であるので、調査区縁辺及びグリッドに沿った各トレンチでの観察結果から説明を行う。11～13層は弥生時代前期頃の耕作土とみられ、14層は縄文時代晩期～弥生時代前期の包含層で、低地部のみ認められる。15層は縄文時代晩期の土器を包含する黒色粘土と暗灰色粘土の互層で、16層が谷状に落ち込んでいる部分（自然河道？）に堆積した層と考えられる。

遺構

2～13層の各耕作土の上面で水田跡の検出に努めたが、明確な畦畔を検出できたのは、6層と8層のみであった。但し、2層上面では畑遺構、4層上面では欽状遺構を検出した。また、11・13層上面では段状の地形が確認されたが、それが水田跡と関連するものかどうかは未確定である。水田以外については、2～6層で条里坪境を画すると推測される東西方向の溝が確認されている。特に、6層検出の溝は最大幅12mをこえ、水利施設に関連するとみられる杭列も出土している（図5）。また7層では、条里の溝と位置はずれるが、条里の方向にほぼ沿った東西の溝が1本、それにほぼ直交する南北の溝が2本検出されている。一方、8～9層では、地形に規制される形で、傾斜方向に交差する北東から南西方向への溝が数本検出されている。いずれも水田経営に関わる溝と考えられるので、溝の状況から水田開発のあり方、例えば条里制の施行時期や施行状況などを推測できる貴重な資料である。今後、他地点での状況とあわせて検討していく必要がある。（土井）



- | | | | | |
|-------------|------------------|------------|-------------------|----------------|
| 1 造成土 | 5 淡灰褐色砂質土 | 8 明灰褐色粘質土 | 11 淡黒褐色砂質土 | 15 黒色粘土 (縄文晩期) |
| 2 灰褐色粘質土 | 6 暗灰褐色 | 9 暗褐色粘質土 | 12 暗褐色砂質土 | 16 暗灰色粘質土 |
| 3 黄灰褐色粘質土 | (古代) | (弥生) | 13 黒褐色土 (弥生前期) | 17 黄褐色砂質土 |
| 4 暗灰褐色 (中世) | 7 新赤褐色粘質土 (古墳後期) | 10 暗灰褐色砂質土 | 14 黒褐色砂質土 (縄文~弥生) | 18 混砂礫 |

図4 土層柱状圖 (縮尺1/40)

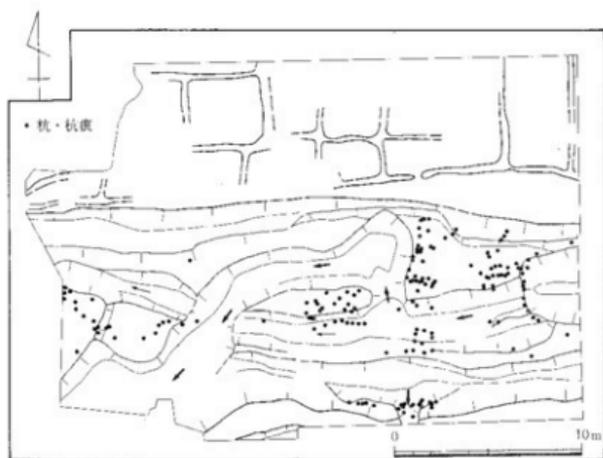


図5 6層上面遺構検出状況 (縮尺1/300)

③ 工学部情報工学科校舎新営に伴う発掘調査（津島北地区 AV・AW05・06区）

調査の経過

工学部情報工学科校舎新営に伴う発掘調査は、1988年10月12日～1989年3月31日までの期間で行われた。調査区は工学部土木工学科棟の西側に隣接して位置しており、調査面積は800㎡である。本調査地点は、1988年8月8日から4日間、先行して試掘調査が行われ^(注3)、その調査所見より、弥生時代～近世に至るまでの水田層の存在と、縄文時代後～晩期の遺構が存在する可能性が指摘されていた。この結果を受けて、建設予定地全面の発掘調査をすることとし、10月12日より造成土の掘削を開始、10月17日より本格的な発掘調査に入った。

なお、本調査は、工学部土木工学科棟を挟んで、西側に約40m離れた工学部生物応用工学科校舎新営予定地の発掘調査と、ほぼ同時に進行する形で行われ、この2件の発掘調査に調査員3名が専従した。また、調査終了直前に、縄文時代の遺構を中心に現地説明会を実施した。

層序（図6）

本調査の層序は、造成土を除くと、基本的には13層に区分される。これは、調査区全体の中で確認されるものであり、一部の深掘り区において、さらに、6層がそれに続くことが確認された（図6）。現地表面の標高は4.3mである。

1層は造成土であり、層厚は平均して80cmほどである。2層は1907年の造成前の旧地表である。3層は茶褐色砂質土でやや粗い砂が混入する。4層は茶灰色砂質土である。マンガン・酸化鉄などが混入する。5層は黄灰色砂質土で、4層と比べて黄色味が強くなる。この層の上面から、南北方向に並列する畦畔2本が検出された。6層は暗黄灰色砂質土である。3～6層は、これまでの調査所見も合わせて、近世の時期に比定することができる。7層は暗灰色粘質土で、粘性・しまりとも良好で均質な層である。この層は津島地区において広く認められ、分層も比較的容易である。南北に延びる畦畔1本が検出されている。8層は黄灰色砂質土で、この7・8層が、時期的に中世と考えられる。9層は黄灰色粘質土で、この層の上面で水田を検出できた。出土土器が僅少であるため、正確な時期は断じ得ないが、古代（9～11世紀頃？）と考えられる。10層は茶褐色粘質土である。酸化鉄が極めて顕著であり、マンガンも多く混入する。分層も容易であった。検出された水田の遺存状態も良好と言える。6世紀後半～7世紀前半のものと考えられる。11層は黒褐色粘質土で、この層も津島地区一帯に広く認めることができる。粘性は強く、しまりも良好である。この層の上面より、弥生時代前期後半以降と考えられる水田が検出された。12層は、11層と13層の漸移的な層であり、中間的な要素を持つ。12層以下は縄文時代後～晩期の包含層であり、12層と13層の上面からは、それぞれ多数のピットを検出することができた。

14層以下は調査区の一部を深掘りすることによって確認された層である。14～17層までは粘質土であり、下層に向かってグライ化が著しくなる。17層は青灰色粘土である。18層は暗茶灰色粘土であり、ラミナ状に細砂が混入する。19層は礫混じり粗砂層で、径2～5cm前後の小礫を含む。また、流木も多く混入していた。14～19層からは、本調査区では遺物の出土は認められなかった。

次に地形の概要について述べる。本調査区は、基本的に南東から北西方向に向かって緩やかな傾斜を持つ。12層上面では、調査区内の高低差は約55cmほどである。この傾斜は、後の堆積によって徐々に解消されていき、11層上面で35cm、10層上面で22cm、9層上面で13cmとなり、8層以降ではほとんど変化は見られない。このようなことから、本調査区は、本来的には微高地上、あるいはその縁辺部に位置していたと考えられる。

調査の概要 (図7～10, 図版9～11)

今回の発掘調査では、5面の水田跡と、縄文時代後～晩期に属するピット群・炉跡などを検出することができた。以下、その概要を述べたい。

5層上面からは、調査区の東側で近世の畦畔2本を検出した。この2本の畦畔は、ほぼ南北方向に並列する。畦畔は幅40～80cmと、その幅にややばらつきを見せる。



図6 土層柱状図 (縮尺1/40)

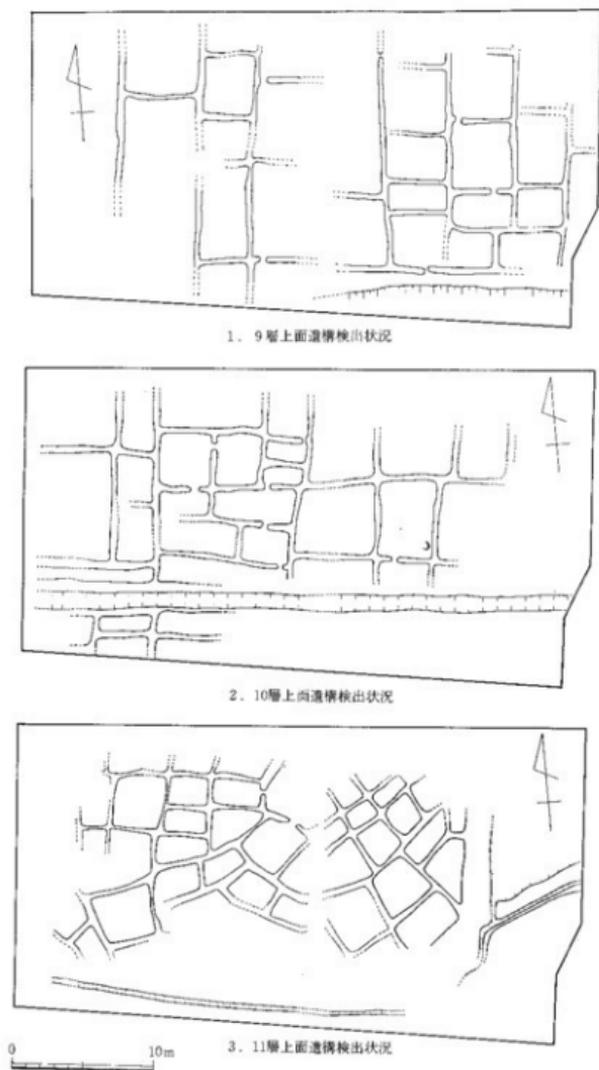


図7 遺構全体図 (縮尺1/400)

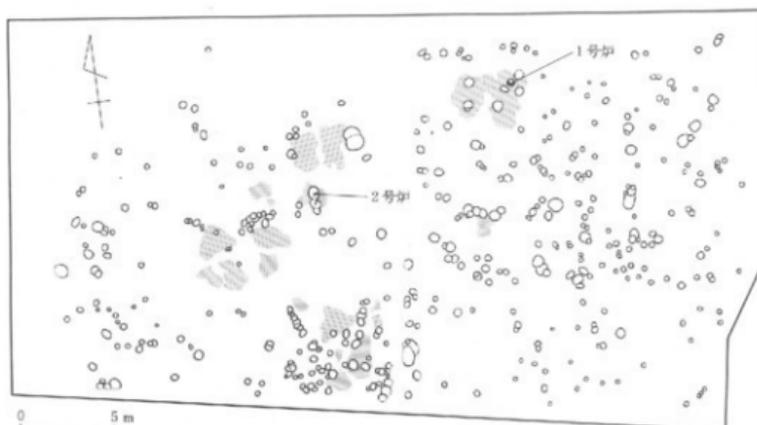
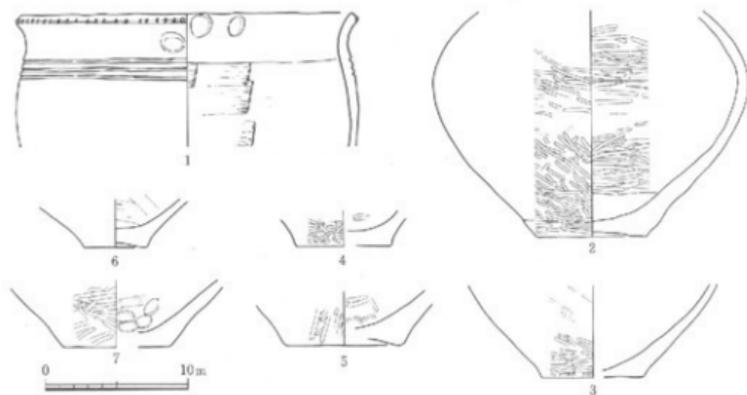


図8 13層上面遺構検出状況 (縮尺1/300)

※スクリーントーン部分は炭化物の集中する範囲。
黒く塗りつぶしている部分は焼土が著しく認められる。



番号	器種	出土地点・層位	形態・手記の符号ほか	色調	胎土
1	依土器 壺	13層	3本のヘラゴキ化粧。内面工具使用の跡ナシ。口縁付近内外面微塵付着。椀圧痕有	褐色	細砂、微塵僅少
2	＊	＊	内面黒鉛灰イナダ・粘結位ヘラミゴキ。外面横・斜めのヘラミゴキ。三塗有り	(外)赤褐色(内)黒色	細砂-粗砂
3	＊	＊	外面黒ハタ後横ヘラミゴキ・胴下半部は斜めミゴキ。内面微塵。黒炭有り	(外)灰褐色(内)茶褐色	細砂-粗砂
4	＊	＊	外面黒ヘラミゴキ。内面黒炭により一部ヘラミゴキ。三塗有り	(外)赤褐色(内)黒色	細砂-粗砂
5	＊	＊	外面黒ヘラミゴキ。内面底部工具使用の跡ナシ-一段横ヘラミゴキ	灰褐色	細砂、微塵僅少
6	縄文土器	13層	外面黒炭。内面工具使用の跡ナシ	(外)黄褐色(内)黒色	細砂多量
7	＊	＊	外面黒ヘラミゴキ。内面黒鉛灰付着-横ナダ。黒炭有り	(外)黄褐色(内)茶灰色	微塵多量

図9 出土遺物 (縮尺1/4)

畦畔相互の間隔は平均して10.5mほどである。また、調査区西端では幅約40cmほどの溝状遺構も認められた。7層からも、調査区東端で、南北に延びる畦畔1本を検出した。これは時期的には中世に属すると考えられる。

9層では、調査区のほぼ全面に広がる水田が検出された(図7)。南北方向を強く指向した水田である。区画は、まず、南北に延びる幾本かの畦畔を基本としている。さらに、その中を東西に畦畔を巡らすことによって、方形の水田を作出させている。南北方向の畦畔は3.2~5.2mの間隔をもつ。同様に、東西方向の畦畔は、ややばらつきがみられる。また、調査区東側南端には、溝と考えられる落ち込みが確認された。これら水田の時期は、9~11世紀頃と考えられる。

10層上面からは、6世紀後半~7世紀前半の時期に比定される水田が検出された(図7)。これも南北方向の指向が強い水田である。調査区内には、ほぼ東西方向に走る幅1m、深さ約25cmの溝が認められ、水田にはこの溝の両側に展開していたと推定される。水田の区画は、ほぼ中央に位置する南北方向の畦畔を境として、区画面積の相違を認めることができる。すなわち、西側がやや小さく区画されていることが理解されよう。これが地形的な影響によるものかは、さらに検討を要するが、いずれにせよ、興味深い現象である。

11層検出の水田は、弥生時代前期後半以降と考えられる。一見してわかるように、地形にかなり規制された区画が成されている。前述したように、この時期の地形は南東方向から北西方向に向かって下降しており、主要な畦畔は、この傾斜に直交するように巡らされている。水田の区画も、傾斜が強いところでは小区画と

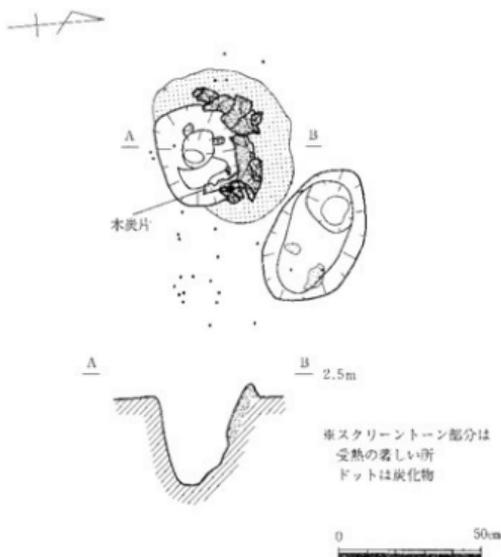


図10 1号炉 平・断面図 (縮尺1/20)

なる。調査区の東側には、畔路と考えられる幅約2mの高まりを検出することができた。さらに、南壁に沿って、東西方向に延びる幅約40cmの水路が確認された。この水路と水田は、ほぼ一連のものと考えられるが、水路が水田に対し、どの様に連結しえたかについては、明瞭に確認することはできなかった。

12・13層からは多数のピットを検出した。これらのほとんどは縄文時代後～晩期に属すると考えられるが、12層上面検出の一部に関しては弥生時代前期後半に属するものもある。12層上面では92個のピット・土壌が確認された。その中の、SK-08からは弥生時代前期後半の甍形土器片が出土した。この時期の土器片は11層上面に集中しており、この土壌の埋土が黒褐色粘質土であることから考えると、本来の掘り込み面は11層中になる可能性が強い。同様に、このような状況が考えられるピット・土壌は他にいくつか認めることができる。このように、12層上面に関しては、遺物量も少なく、弥生時代に属する遺構が混在する状況を呈しているが、この層の上面からは、弥生土器片を出土しないことからみても、概ね、縄文時代晩期に属するものと考えてよさそうである。

13層上面も、また、多数のピットが検出された。その数量は極めて多く、検出は2回にわたって行った。2回の検出で認められたピットの総数は655個にも達する。図8は13層上面で最初に検出されたピット群である。これらピット群の性格であるが、詳細な分析を経ていない現段階では多くを述べることはできない。加えて、遺物量が僅少であるため、積極的な解釈は躊躇されるが、住居址を含めて、何らかの構築物があった可能性が高い。それは、この面で確認された炉跡の存在や、炭化物の集中が認められることから窺えよう。

炉跡は13層上面で2基確認することができた。うち1基は、径35cm、深さ35cmの竈穴である(図10)。この炉の南側壁面は受熱による赤化が著しく、かなりの頻度で使用されたことがわかる。しかし、対症的に炉の北側壁面はほとんど赤化しておらず、様相を異にしている。炉の使用法を暗示しているのかもしれない。なお、この炉に関しては、鳥根大学の時枝克己教授に熱残留磁気の測定を依頼した。

13層上面の時期であるが、遺物量が僅少にあるので正確に時期を断じ得ないが、彦崎KⅡ式土器片が出土しており、ほぼ縄文時代後期後半と考えることができる。

いずれにしても、これまでの岡山大学構内遺跡の調査では、縄文時代後～晩期の貯蔵穴など、低地部の状況が解明されつつある中で、さらに、今回のように微高地上にも多くの遺構が確認されたことは、集落などの存在を含めて、この時期の遺跡のあり方を解明する有力な手がかりとなる。そういった意味でも、本調査の成果は、重要な意義を持つといえよう。(緒川)

3 試掘調査

今年度は岡山大学構内において、3件の試掘調査を行った(表1)。いずれも津島地区におけるものである。工学部ならびに農・薬学部の調査では弥生時代前期から縄文時代の遺跡の存在を確認した。また、構内の西端に位置する国際交流会館予定地の調査では、広範囲に低湿地が広がる状況が推定される資料を得た。

① 工学部校舎(情報工学棟・生物応用工学棟)新営予定地

(津島北地区AV・AX04・06, AW04区)

調査の経過

工学部では、情報工学科と生物応用工学科の校舎が不足していることから、新校舎の早急な建設が望まれた。そこで、建設予定地内において遺跡の有無を確認するため試掘坑を5ヶ所(TP1~5)設定し(図11)、調査を実施した。その後、建設予定地の変更に伴い、試掘坑を1ヶ所(TP6)追加設定し、調査を行った。各試掘坑は、4m×4mの方形を標準とした。期間は1988年4月11日~5月12日(TP1~5)と、8月8日~8月11日(TP6)であり、前半に調査員2名、後半に1名が担当した。

調査結果

各試掘坑の層序は柱状図に示す通りである(図12)。

岡山大学津島地区は、全体的に1907年(明治40年)の旧陸軍屯営地建設に伴う造成土が1~1.5m程堆積しており、各試掘坑1層がこの造成土にあたる。2層は、この造成以前に営まれた水田耕作層である。2層以下には幾枚かの水田耕作層があり、これらは近世のも

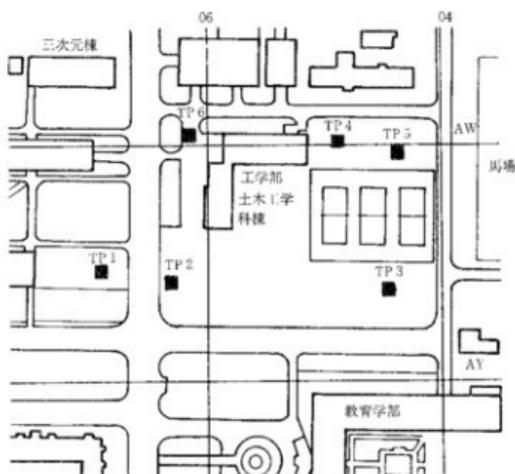
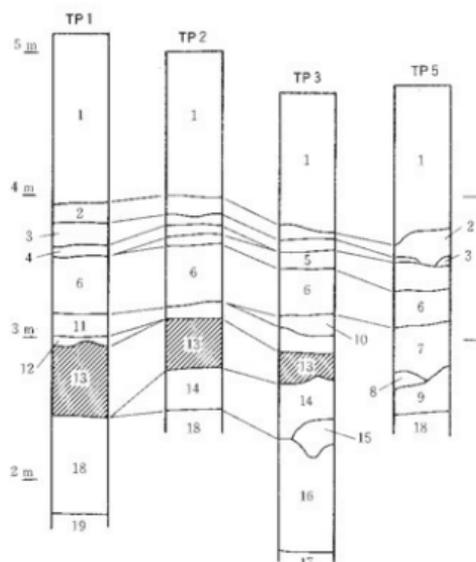


図11 試掘調査地点図 (縮尺1/2400)

のと考えられる(3・4・5層)。6層は時期的には中世に比定され、酸化鉄やマンガンの集積が顕著な水田耕作土である。TP1～3では、6層がさらに細分される可能性がある。この中世の水田耕作土までが各試掘坑に共通して存在する。

7層以下の堆積状況は、5ヶ所の試掘坑の中で南側に位置するTP1～3と、TP6がそれぞれ近似する層序をなすが、北側に位置するTP4・5では、その層序は大きな相違をみせる。TP4・TP6に関しては発掘調査が行われ、前項で述べているので、層序等の説明はここでは省略したい。TP5では、7層から9層は砂質土層になっており、当初は旧河道埋土と考え

られたが、生物応用工学科棟建設予定地の発掘調査で、古代の溝の埋土であることが判明した。TP3では11層の下半は砂質が強まる傾向にある。12層は、下層の黒褐色粘質土(13層)を覆う砂質の強い暗茶褐色砂質土である。13層の上面は弥生時代前期と考えられる水田の検出面である。また、13層中からは縄文土器が出土しており、13層は縄文時代から弥生時代にかけて形成されたものと考えられる。14層は暗茶褐色砂質土、15層は黄褐色土、16層は砂質



※TP4・6は省略

- | | | |
|---------------|------------------|---------------------|
| 1 造成土 | 7 灰褐色砂質土 (古代溝埋土) | 13 黒褐色粘質土 (縄文～弥生前期) |
| 2 灰色粘質土 | 8 明灰褐色砂質土 () | 14 暗茶褐色砂質土 (縄文後～晩期) |
| 3 黄褐色粘質土 (近世) | 9 暗青褐色砂質土 () | 15 黄褐色土 () |
| 4 黄茶褐色粘質土 () | 10 暗灰褐色粘質土 | 16 緑灰色土 () |
| 5 黄灰褐色粘質土 () | 11 灰褐色粘質土 | 17 青灰色砂質土 |
| 6 青灰色粘質土 (中世) | 12 茶褐色砂質土 | 18 緑灰色粘質土 |
| | | 19 明黄褐色砂質土 |

図12 土層柱状図 (縮尺1/40)

の強い緑灰色土層であり、縄文時代後期～晩期の土器が出土している。17層は青灰色砂質土層である。18層は、緑灰色の粘質土で、グライが著しい。上部に土器が検出されている。19層は、砂質の強い明黄褐色を呈する層であり、遺物は認められなかった。

今回の試掘調査では、容量約28ℓのコンテナ約1杯分の土器が出土している。特に遺物量が多かったのは、T P 3、T P 4である。しかし、これらの遺物も細片が多く、時期を判定できるものは限られている。以下、図13に示した遺物の説明をする。

1から4は縄文時代後期の土器である。1は浅鉢の口縁部で、T P 3の15層から出土した。2は波状口縁の浅鉢で、口縁部に刻み目があり、口縁直下には刺突痕が認められる。さらにその下部に山形の凹線が入っている。T P 3の14層で出土した。3は外面に縄文が施されている。T P 2の13層出土である。4はT P 3の16層より出土したもので、内外面共に粗いナデ調整が施されている。16層出土の遺物は4のみであった。17はT P 3の14層から出土したサヌカイト製のスクレイパーで、横長剥片の末端部を刃部として、調整が施されている。出土層位より縄文時代後期～晩期の所産と考えられる。

以上の調査結果を簡単にまとめたい。

中世以後の水田遺構については調査区全面に広がっていたと思われる。それ以下については、T P 5は、7～9層が北に向かって下がっていることから古代溝の南側縁辺付近に位置すると推測される。一方、T P 1～3は微高地上に位置していて、弥生時代前期以後の水田遺構が良好な状態で検出される可能性が高い。特に、T P 3では、弥生時代前期水田の保存状態がよく、この周辺にも広く認められるものと考えられる。とすれば、これまでの調査結果と考え合わせてみても、構内津島地区の一帯は、弥生時代には相当大規模な水田開発が行われていたとも推測できよう。また、弥生時代

水田遺構の下には、縄文時代後期から晩期の遺構が存在する可能性が強い。特に、T P 1～3などは、微高地上に位置しているものと考えられ、そのような場所においては、今後、集落の存在ということも想定する必要があるかと思われる。(編川)

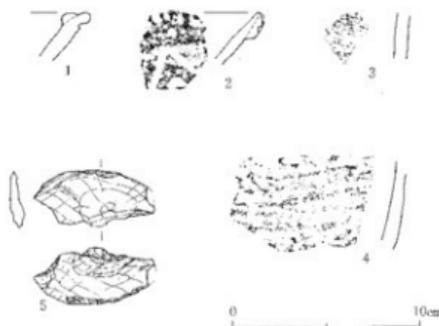


図13 出土遺物 (縮尺1/3)

② 農学部動物実験施設及び薬学部遺伝子実験施設予定地（津島南地区 BD18・19区）

調査の経過

農学部小動物飼育室南側の現在畑地となっている場所に農学部と薬学部の実験施設の新舎が隣接して計画されたのに伴い、遺跡の有無の確認を目的として試掘調査を実施した。

試掘期間は1988年5月23日～27日で、調査員2名が担当した。予定地内に3×5mの試掘坑を3ヶ所（西よりTP1～3）設定した（図14）。各試掘坑とも造成土除去後、廃土置き場用のスペースを除く3×3mの範囲を標高2m前後の砂層上面まで分層発掘を行った。以下については層の堆積状況把握のため、側溝を砂層上面より50cmほど掘り下げたところ、湧水と砂層の崩落でそれ以上の掘り下げが不可能となり、砂層の堆積状況を観察するのみにとどめた。

層序と地形（図15）

1層は1907年の陸軍屯営地造成に伴う造成土である。

2層は明治の水田層である。3・4層は近世の、5層

は中世の水田層で、酸化鉄とマンガンの集積層の分化・

発達が認められる。これらの層はどの試掘坑でも層厚・上面レベルが近似する。

TP2で見られる6層は層厚が薄く、上面の凹凸が著しい。弥生時代の層と推測されるが、出土遺物に乏しく確証を欠く。TP1・2で見られる7層は縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物を含む腐植質の堆積層で、性状や時期より津島地区の微高地頂部付近に堆積する黒褐色土に対応すると考えられる。層厚はTP1よりTP2の方が厚い。

8層はかなり厚く堆積している。上面はTP2からTP1・3の方向へ上がる。出土遺物が無く、形成時期は不明である。

予定地内の層の堆積状況は、厚く堆積する8層の上面が北へ傾斜する部分に6・7層が堆積し、その上に2～5層が水平堆積するものと考えられる。

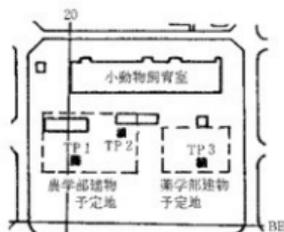
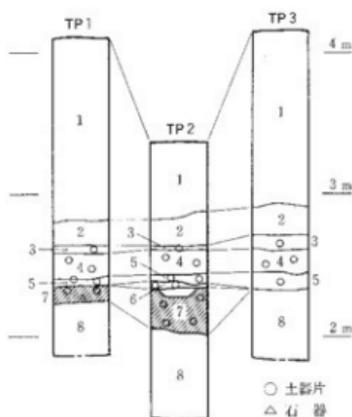


図14 試掘調査地点図（縮尺1/2400）



- 1 造成土
- 2 青灰色砂質土（明治）
- 3 粉褐色砂質土（近世）
- 4 暗黄灰色粘質土（近世）
- 5 暗灰色砂質土（中世）
- 6 黄褐色砂質土（弥生？）
- 7 黒褐色砂質土（縄文晩期～弥生前期）
- 8 黄褐色堆砂

図15 土層柱状図（縮尺1/40）

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての予定地内の旧地形は北側に谷状地形を伴う微高地であったと考えられる。そして、中世以降は比較的平坦な水田地形であったと考えられる。弥生時代中期から中世までの状況は不明だが、黒褐色土の堆積状況を考慮すれば、微高地頂部の削平が何度か行われた可能性がある。

遺構・遺物 (図16・17)

遺構はT P 1とT P 2の7層上面で検出された。T P 1では東西方向の溝状遺構が1条と小穴約30基が検出された。溝状遺構は幅50cm、深さ5cmの浅いU字形断面のものである。小穴は溝状遺構の北側に群在する。1つの小穴は径5cmほどで、中に暗灰色粘質土がつまっている。断面を観察していないので、断面形状や深さは不明である。T P 2では南北方向の溝状遺構が2条検出された。両者とも幅30~40cm、深さ5cmの逆台形断面のものである。なお、溝状遺構の埋土は全て黄褐色砂質土で6層に似るが、色調がやや白っぽく黒褐色土の小ブロックを含んでいる点が異なる。

遺物は土器類と石器類がある。土器類は陶磁器(3・4層出土)、中世土器(5層出土)、弥生土器(6・7層出土)、縄文晩期土器(7層出土)が挙げられる。大半が破片で、器種などは明確にし難い。石器類は安山岩製打製石器と下部に刃部を有する安山岩製剥片が挙げられる。両者ともT P 1の7層下面で出土している。(安井)

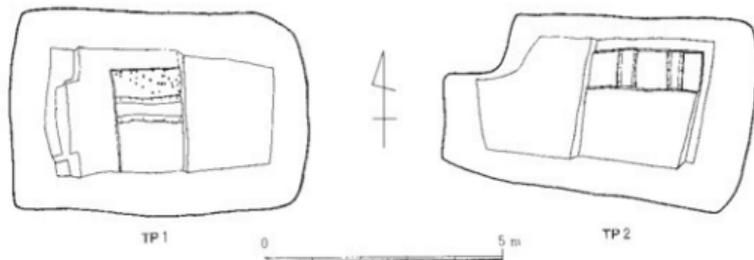


図16 遺構検出状況 (縮尺1/120)

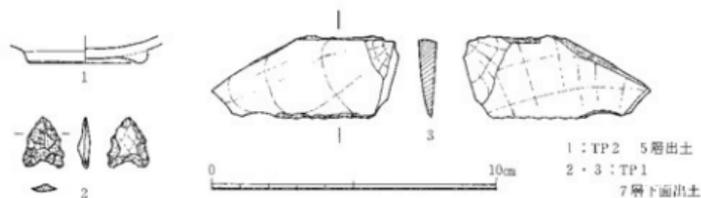


図17 出土遺物 (縮尺1/2)

③ 国際交流会館予定地（津島南地区 B C 26区）

調査の経過

国際交流会館の増築計画に伴い、事務局から立会調査の依頼があったが、予定地内に遺跡の存在する可能性があるため、3ヶ所に3×3m規模の試掘坑を設定し、試掘調査を行うこととなった。

調査期間は1988年6月6日～6月10日である。調査員は、2名が担当した。

調査結果 (図18)

1層は造成土で厚さ約1.2mを測る。2層は明治水田層で、3層がその床土と考えられる。4～7層は水成堆積と思われる砂混じりのしまりの悪い層で、水田耕作上とは考えがたい。7層上面で、中世の土小器片が約20点出土していることから、6層までが近世以降、7層は中世の堆積層ではないと思われる。8層は、TP3のみで認められる部分的な砂質土層で、9層は、上層に比べて粘性を若干帯びるが、性質は同様である。10層以下は、均質な青灰色粘土で、基盤に当たる。湧水の著しい層である。

以上の土層観察結果から、旧地形を復元してみると、基盤層で30cm程あった北から南への傾斜が、後の堆積作用によって、次第に解消され、明治水田形成時には、ほぼ水平にならされていることがわかる。また、津島地区全般と比較して、明治水田上面のレベルが、標高2.4mと1m近く低いこと、3層以下より水田址が検出されないこと、縄文晩期～弥生前期に当たる特徴的な黒褐色土が認められないことから、当試掘地点は、長期間低湿地で人為的開発が行われていなかったと考えられる。これはB E 22区での立会調査（1987年度）結果と同様で、津島地区西部では、広範囲に低湿地が形成されていたと推察できよう。（藤原）

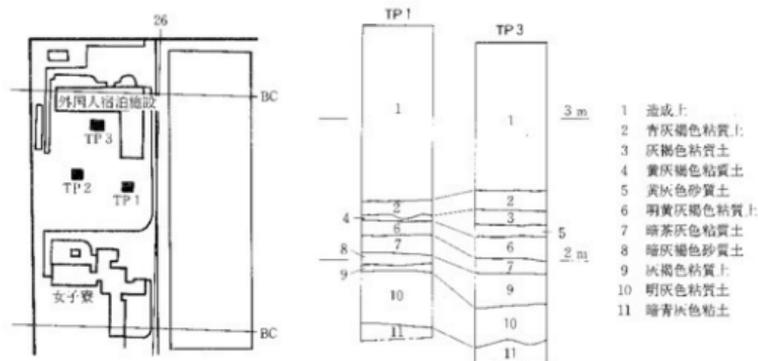


図18 試掘調査地点図・土層柱状図 (縮尺1/2400・1/40)

4 立会調査

本年度は津島地区15件、鹿田地区14件、計29件の立会調査を実施した(表1)。以下、造成土下に及んだものについて、その概要を述べる。

(1) 津島地区

津島南地区西北端にあたるBB・BC26区で国際交流会館新営工事が行われ、それに伴い7件の立会調査が集中した。建物本体部(調査⑬)および合併処理槽部(調査⑭)の掘削では、縄文~弥生時代にかけての微高地を形成した黒褐色土と黄褐色砂がなく、水成堆積とみられる粘土層の発達が認められた。とりわけ調査⑬では粘土層が3.4m以上堆積する状況にある(図19)。明確な遺構、遺物とも出土しなかった。

同様な堆積状況は、これまでBG22, AV16・17区でも確認されており、^(注7)各地点がかつての低湿地にあっていることを示している。ところで、造成土直下の1907年地表面は、現在のところ、最高部はAV00で標高4.0m、最低部はBB26で2.4mを記録しており、基本的に西に低くなる傾向が窺える。この状況が旧地形を反映しているとすれば、上記の三地点がいずれもその低位部に位置することから、一連の低湿地であった可能性が指摘できる。津島地区の旧地形を復元していく視点で留意しておきたい。

津島南地区BF・BG10・11区(調査⑰)では、黒褐色土の有無から、12ライン東10m付近に旧微高地の西限が見出された。この微高地は、BG09区で確認されたものと一連であると思われる。土層断面を直接観察することができない小規模掘削からも、有効な情報が得られることが示された。

(2) 鹿田地区

鹿田地区では、14件の立会調査は、いずれにおいても掘削深度が造成土内もしくはその直下におさまったため、特記すべき知見はない。(石坂)

5 その他の活動

(1) 鹿田地区建物配置状況の平板測量

鹿田地区では各種の調査(特に立会調査)を記録する際に、学内建物配置図と岡山市街図を合成したものを使用していた。しかし、この学内図は度重なる建築に伴って、建物位置や敷地の外枠に歪みが出てきていたため、調査地点の正確な記入ができない状態にあった。そこで、本年度は、より



図19 土層柱状図
(調査⑬)

(縮尺1/40)

正確な配置図の独自製作が可能な状態となったため、昨年度末に計画・開始していた平板測量を本格的に実施した。

構内設置の公共座標から大学構内に設定している構内座標上に測量の基準となるポイントを随時落として、1/400の縮尺で全体の建物配置の平拔測量を行った。6月末で一応終了し、1989年度初めに一部追加測量を行い、完成した。

本年度はその図面に基づいて図版4を製作している。また、鹿田地区での調査地点を示す構内座標地区名は一部でかなり変更が生じているが、本年度の表記により全て訂正したものとする。(山本)



写真1

(2) 科学的保存処理

工学部情報工学棟の調査で検出した縄文時代後～晩期の炉址⁽¹⁾の移築と、生物応用工学科棟の調査で出土した縄文時代晩期の貯蔵穴内のアンペラの取り上げにウレタンを使用し、保存処理を行った。それぞれ、2液混合発泡硬化ウレタンと2液型瞬間現場発泡ウレタン(商品名パーシフォーム)の異なる2種のウレタン材を用いたことから、両者の比較ができたので、その方法と併せて報告する。



写真2

[ウレタンによる遺構の移築と保存処理方法]

① 2液混合発泡ウレタンによる処理

遺構を移築する際、遺構の軽量化、保護のため、ウレタンを使用するのが最良であるが、工期との関係から、今回はウレタンを用意することができず、土柱状に残した炉址を木枠にはめ込んで、現場から移築した。炉址の表面には、破壊を防ぐため、バインダーを塗付し、アルミホイルで覆った後、石膏で補強した。移築した炉址はかなりの重量となり、運搬に困難をきたしたので、発掘終了後、ウレタンによる保存処理を行った。使用したウレタンは、2液を混合して発泡材を作るものである。



写真3



写真4

(方法)

- 1 炉の表面に剝離材の和紙を2-3重に水張りする。(写真1)
- 2 ダンボールで外枠を作り、ウレタンの2液を同量バケツで混ぜ合わせ、注入する。(写真2)
- 3 発泡が完了、硬化したら、反転して炉底から土の厚さが5cm程になるまで余分な土を取り除き、ウレタンを直接注入する。(写真3)
- 4 硬化後、外枠をはずし、展示ケースにあわせて余分なウレタンを除去する。(写真4)
- 5 炉面を覆っているウレタン、和紙を取り除き、整形する。
- 6 展示ケースに入れる。

当初の目的であった遺構の軽量化は、ウレタンに覆われている状態で、大人2人で軽く持ち上げられる程になった。ウレタン処理にかかった時間は、約4時間である。

5・6の作業は、展示公開に向けて、今後行う予定である。

② 2液混合瞬間現場発泡ウレタンによる処理

編み物等の植物質遺物の保存処理には、普通、かなり脆い状態で出土することから、ウレタンを使用し土ごと取り上げ、余分な土を取り除いた後、遺物の表面を保護しPEG含浸法をとる。今回、貯蔵穴から出土したアンペラは、短期間のうちにPEG含浸処理ができないので、ウレタンで完全に密封して取り上げ、保存することにした。

2液混合瞬間現場発泡ウレタンとは、ポンペに封入されている液を付属ノズルで混合吐出するシステムである。

(方法)

- 1 アンペラの周囲を10cm程残して掘り、土柱状にする。
- 2 アンペラの表面に和紙を水張りする。乾燥を防ぐため、和紙に充分に水を含ませウレタンを注入し、周囲にも吹き付け、ウレタンで包み込むようにする。(写真5)
- 3 アンペラから20cm程下を削り込み、番線で地面と切り離す。
- 4 反転、余分な土を取り除き、ウレタンを吹き付け、完全に密封する。
- 5 ウレタン、和紙を除去し、余分な土を取る。
- 6 アンペラを保護してPEG含浸処理を行う。



今回は、枠を使用しなかったため、ウレタンを

吹き付けた遺物は不整形な形となり、運搬に手間取った。現場で、余分な土をできるだけ除去し、コンパクトに仕上げることや、運搬時の工夫が必要であろう。5・6のPEG含浸処理は今後行う予定である。

2種類のウレタンを使用して、その長・短所を表3にまとめた。どちらのウレタンでも、短時間に、比較的簡単に遺構・遺物の取り上げができた。今後も、より良い形での研究資料の保存方法を模索し、最善をつくしていきたい。(藤原)

表3 両ウレタン比較表

ウレタン種類	注入方法	商品名・価格	長 所	欠 点
2液混合発泡 硬化ウレタン	流し込み	ソフラーR (三畳商事) 各20kg36000円	比較的安価 開封後の使用期間が長い (約2ヶ月)	発泡・硬化に時間がかかる 混合割合で発泡・硬化にむら が生じる 隙間への注入が困難
2液混合瞬間現 場発泡ウレタン	吹き付け	パーシフォーム (旭硝子) 標準セットS-15 76000円	簡便、扱い易い 硬化時間が短い 発泡・硬化にむらが無い 周囲に直接吹き付けられるの で外枠の必要が無い	ポンプ内の残存量が確認でき ない 高価 保存がきかない(約1ヶ月)

註

- 1 「岡山大学構内遺跡調査研究年報」4 1987 18頁 岡山大学埋蔵文化財調査室
- 2 1989年5月末日に予定通り調査が終了した。15号中および16層上面で縄文時代晩期頃の貯蔵穴を計13基検出した。その内、2号貯蔵穴と呼んでいるものには、底に敷いたと思われるアンペラが非常に良好な状態で残存していた。
- 3 1.学部関連の試掘調査の概要は本年報の第2章の2(24頁)を参考にされたい。
- 4 年報には、調査時の整理番号をそのまま使用している。
- 5 調査時に確認した総計である。今後、いくつかの分析を行う過程で、総数に若干の変動が有り得ることを指摘しておく。
- 6 「岡山大学構内遺跡調査研究年報」5 1988 36頁 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 7 「岡山大学構内遺跡調査研究年報」4 1987 18頁 岡山大学埋蔵文化財調査室
「岡山大学構内遺跡調査研究年報」5 1988 36頁 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 8 「岡山大学構内遺跡調査研究年報」4 1987 12~15頁 岡山大学埋蔵文化財調査室
- 9 本年報 18~23頁

第3章 1988年度普及・研究・資料整理活動

1 資料整理

本年度は次の3件の発掘調査の資料整理を行った。

- ① 鹿田遺跡（医療技術短期大学部校舎新営に伴う発掘調査）
本体工事及び南北共同構部分：出土遺物の実測・浄写を実施
- ② 津島地区遺跡群（学生部男子学生寮新営に伴う発掘調査）
出土遺物の実測・浄写，出土種子類の洗浄・採集を実施
- ③ 鹿田遺跡（医学部附属病院管理棟新営に伴う発掘調査）
出土遺物の洗浄・一部復元及び注記，出土種子類の洗浄・採集を実施

2 刊行物

- ① 岡山大学構内遺跡調査研究年報5 1987年度
1988年10月31日 発行
- ② 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号
1988年10月 発行

なお 1988年度までの刊行物については附表3・4で一覧にして挙げている。

3 調査員の活動

(1) 資料収集活動

- 石坂俊郎 〈静岡平野・甲府盆地の古墳時代資料〉
山梨県立考古博物館・富士市立博物館ほか
〈四国の縄文時代晩期・弥生前期土器〉
高知県教育委員会・松山市教員委員会
- 緒川一徳 〈旧石器・縄文時代の石器を中心に〉
群馬県埋蔵文化財調査事業団
岐阜県教育委員会・羽曳野市教育委員会ほか
日本第4紀学会参加（於東北大学）
第12回近畿旧石器交流会参加（於同志社大学）
第5回中・四国旧石器文化談話会参加（於愛媛大学）
- 土井基司 〈中・近世土器を中心に〉

4 日記抄

1988年		10月12日	工学部情報工学科校舎新営に伴う発掘調査開始：絹川・藤原
4月1日	入倉・絹川・土井・藤原・若林、文学部助手として勤務 高橋・安井、技術補佐員として勤務 竹内・中塚・福田・前原・佐々木、非常勤職員として勤務	10月14日	月例職員会議（第5回）
4月11日	工学部試掘調査：絹川・土井	10月15日	鹿田事務所引越し（医学部基礎医学棟から同附属病院旧管理棟へ）
～5月12日		～19日	年報5・センター報 発行
4月27日	鹿田地区から津島地区への備品等の引越	11月6日	文・法・経職員組合の文化講座で発表「キャンパスの埋蔵文化財」：山本
5月13日	運営委員会開催後懇親会	11月11日	月例職員会議（第6回）
5月23日	農学部・薬学部試掘調査：入倉・安井	12月5日	愛知県陶磁資料館から遺物返却
～27日		12月8日	津島地区に収蔵庫完成
5月25日	管理委員会開催	12月9日	月例職員会議（第7回）
5月30日	月例職員会議（第1回） ・試掘および運営委員会報告	12月12日	収蔵庫披露
6月6日	国際交流会館試掘調査：土井・藤原	12月14日	引越し（鹿田地区管理棟から津島地区へ） ～20日（本器が残る）
～10日		12月28日	仕事納め
6月24日	月例職員会議（第2回） ・発掘・試掘調査計画 ・センター報・企画展の提案	1989年	
6月27日	大学院自然科学研究科棟に伴う発掘調査開始：入倉・若林・高橋・安井	1月4日	仕事始め
7月18日	岡山大学博物館学実習開始	1月5日	発掘現場仕事始め
8月5日	月例職員会議（第3回）	1月13日	月例職員会議（第8回）
8月8日	工学部第2次試掘調査：藤原	1月27日	運営委員会開催
～11日		2月3日	土壌分析結果受け取り（大学院自然科学研究科棟発掘資料）
8月22日	絹川出張（24日まで）	2月10日	月例職員会議（第9回）
9月2日	岡山大学博物館学実習終了	2月18日	現地説明会開催（大学院自然科学研究科棟子定地発掘調査）
9月9日	月例職員会議（第4回）	3月1日	運営委員会開催
9月20日	工学部生物応用工学科校舎新営に伴う発掘調査開始：絹川・土井	3月3日	月例職員会議（第10回） ・運営委員会報告
9月30日	鹿田遺跡出土土器（人面刻土器）を愛知県陶磁資料館に貸し出し	3月19日	大学院自然科学研究科棟新着に伴う発掘調査終了
10月5日	土壌分析（大学院自然科学研究科棟発掘）を医学部附属病院薬剤部に依頼 センター報（第1号）入稿	3月20日	入倉出張（22日まで）
10月6日	土井・藤原・山本出張（8日まで）	3月30日	本器引越し（鹿田地区管理棟から津島地区へ） 高橋退職
10月1日	石坂・若林出張（13日まで）	3月31日	工学部情報工学科校舎新営に伴う発掘調査終了 近藤センター長辞任、入倉退職

5 1988年度までの遺物収蔵量および保管施設

(1) 遺物収蔵量(表4)

1988年3月31日における本センターの遺物収蔵量は、鹿田遺跡(医学部附属病院外来診療棟予定地・NMR-CT室予定地):726箱、同遺跡(医療技術短期大学部校舎予定地):125箱、同遺跡(医学部附属病院管理棟予定地):119箱、農学部合併処理槽・排水管理設予定地:18箱、学生部男子学生寮予定地:48箱、大学院自然科学研究科棟予定地:88箱、工学部情報工学科校舎予定地:13箱、工学部生物応用工学科校舎予定地:26箱、試掘調査:8箱、立会調査:5箱、総計1,176箱を数える。詳細は表4に挙げた。1箱の容量は約30ℓを目安としている。また、木器の中で大型水槽に保管のものについては1箱に換算して計算している。

(2) 管理・保管施設

本センターの管理施設並びに収蔵施設は、調査室設立当初から鹿田地区に置かれていたが、1987年11月に埋蔵文化財調査研究センターに改組されたのに伴い、1987年度末には、津島地区に新たに建設された。しかし、収蔵施設を作っていなかったことから、当分の間、津島地区と鹿田地区の両方に分散した形で仕事を行わざるを得ず、早急な収蔵施設建設が望まれた。

本年(1988年)12月、管理施設北側に2階建ての収蔵施設が完成し、鹿田地区から津島地区へ移動が可能になったため、遺物等を鹿田地区から津島地区へ3回に分けて移動した。それに伴い、1986年以来使用してきた医学部附属病院管理棟の1階西半分(292.3㎡)は同病院に返還することとした。また、医学部の再利用計画により、調査室設立以来使用していた医学部基礎医学棟内の一室(約150㎡)の返還が余儀なくされたため、それに代わる鹿田地区連絡所として、旧混合病棟の東にある旧管理棟の二階の一室(約25㎡)を借用することとなった(図版4)。ここには、原則として、職員1名が常勤して、鹿田地区の立会調査等に対応した。医療技術短期大学部建設に伴って解体された旧精神科棟そして管理棟と短期間のうちに移動を重ねた遺物保管も、ようやくしばらくの安定を得ることができた。津島地区の管理施設の面積は100㎡、収蔵施設の延面積は150㎡(1・2階各75㎡)を測る。1989年度には残り150㎡の収蔵施設が建設予定である。

昨年度の使用総面積は347.3㎡であり、今年度は最終的に津島地区で250㎡、鹿田地区で約25㎡である。

(山本)

表4 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要

所属	種類	地区 調査名称	箱数(1箱:約30ℓ)					備考	文献
			総数	土器	石器	木器	その他		
医病	発掘	鹿田 NMR-CT室	116	90	3	20	3 ガラス 鉄銅 織物	3 弥生後期-中世 田舟・木筒	⑦
＊	＊	鹿田 外来診療棟	610	491	6	60		50 弥生中期-中・近世 笠平状・楕状木器等	＊
医短	＊	鹿田 校舎	122	30		90		2 古代-中世	⑧
＊	＊	＊ 配管	3	3				古代、鹿角製品	⑧
医病	＊	＊ 管理棟	119	79	1	20		19 弥生後期-中・近世	＊
農	＊	津島南 合併処理槽 排水管	18		7 6	1		4 縄文晩期-弥生前期	④
学生	＊	津島北 学生寮	48	30	6	2		10 縄文後期-弥生、古代-近世	⑧
大	＊	＊ 自然科学研究科棟	88	54	2			32 耳栓・木製船(縄文)	⑨
工	＊	津島北 工学科校舎	13	7	1			5 縄文後期-近世	＊
＊	＊	津島北 生物応用工学科校舎	206	20	1	5		縄文後期-近世 人形木器	＊
医病	試験	鹿田 駐車場	1	1				弥生-中生	⑤
学生 教育	＊	津島北 男子学生寮 研究棟	1	0.7	0.3			縄文後期-弥生前期	＊
学生	＊	津島南 屋内運動場	1	1				縄文晩期-弥生前期	⑤
大	＊	津島北 自然科学研究科棟	1	1				縄文後期-弥生前期	＊
事務	＊	津島 外国人預舎	1	1				縄文-中世	⑧
理	＊	津島北エレベーター	0.3	0.3				中・近世	＊
教委	＊	津島南	0.7	0.7				縄文・中世	＊
工	＊	津島北 校舎	1	1				縄文-近世	⑩
農・畜	＊	津島南 動物実験・ 遺伝子実験施設	0.7	0.7				縄文-弥生、中・近世 石磨・鉄器	＊
事務	＊	津島南 国際交流会館	0.3	0.3				中世	＊
全学	立会	'83年度	2	2				分銅形土製品	⑪
＊	＊	'84年度	1	1					⑫
＊	＊	'85年度	1	1					⑬
＊	＊	'86年度	0.5	0.5					⑭
＊	＊	'87年度	0.5	0.5					⑮
総 箱 数			1176.0	829.7	21.3	197	1	127	

文献番号は附表3・4の番号に対応する。文献⑨は本年報6を指す。
 ＊ 工学部生物応用工学科棟の発掘調査は1989年5月31日に終了した。1989年3月31日現在の遺物量は、発掘途中のものである。発掘終了時(5月31日)の遺物量は土器:20箱、石器:1箱、木器(人形・杖・網代等):22箱、サンプル(ドンダリ等の堅果類他):2箱(推定)、総数:55箱である。

第4章 1988年度埋蔵文化財調査研究センター活動のまとめ

本年度は埋蔵文化財調査研究センターに改組されて、人材・施設・その他諸々の状況が実質的に一新された1年であった。

津島地区における3件の発掘調査では、特に縄文時代の遺構・遺物について岡山大学構内津島地区がいかに豊富な地区であるかを印象づけた。大学院自然科学研究科種子定地・工学部生物応用工学科種子定地の調査では縄文時代の河道部傾斜面に作られた貯蔵穴が検出され、当時の低地利用の状況や食生活の一部を復元できた。また、工学部情報工科学科定地の調査では集落にごく近い平坦な地形での遺構のあり方(炉と小穴など)が確認された。遺物についても、各地点とも縄文時代のものが突出している。多量の縄文後期土器に加え、西日本では珍しい耳栓・櫛・編物なども出土した。こうした遺構・遺物の重要性を考えると、その保存問題も近い将来クローズアップされてくる可能性が濃いように思われる。また、遺物出土レベルが予想以上に低く、現地表面から4m下の砂礫層に確認され、以下については多量の湧水で未確認ではあるが、下部に向かう可能性があることが判明した今回の調査は、今後の津島地区での試掘・発掘調査を行う上で、従来の方法では到底対応できず、発掘方法・面積・期間・予算などあらゆる面で検討し直さざるを得ないことが明瞭となり、遺跡保存の問題と併せて、今後大きな問題を残すこととなった。

また、発掘調査において、新たな試みが行えたことも大きな収穫であった。土壌のカルシウム分析では医学部附属病院薬剤部の先生方の協力を得ることができた。そして、科学的保存処理として、縄文時代の炉・編物の取り上げも実験できた。

調査以外では、調査研究員間に普及・広報活動での意識の盛り上がりがあり、懸案であったセンター報の発行の実現のほか、展示会開催の計画も検討された。

以上のように、本年度は、外面的な体制の拡充が整えられ、ある程度の成果は挙げられた。しかし、内部の状況は様々な点において、依然として厳しいものがある。内面的な部分の拡充に向けて、学内ではやっと取り組みが確について広報・啓蒙活動の発展的継続を、また、センター内では、科学的保処理あるいは科学的分析への積極的取り組みなど含めた調査方法の検討、研究体制の充実などを模索して行くことが求められる。調査員の自覚と各方面への積極的取り組みによって、より一層の脱皮を図る必要があろう。様々な問題を提起したこの1年を、次年度へのステップとして、一層の努力を続けて行きたい。(山本)

附 表

附表1 1982年度以前の構内主要調査(1980~1982年度)

年度	道 路 名 調査地区名	種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積 (m ²)	文献	備 考
1980	鹿 田	立会	畜	岡形病院内棟新設	岡山市教育委員会	8.0		
1981	津島南 BD 25	*	農	家畜舎新設	*			
	津島北	*	文法 経	合併処理棟開設	*			
	津島南 BD 09 BC 09~11	*		基幹整備(共同溝取付)	*			
	津島南 DD~BE 04~07	*		陸上競技場改修 (配水管埋設)	*			
	鹿 田	*	医病	高気圧治療室新設	*			
	*	*	*	動物実験施設新設	岡山市教育委員会			試験室をせり破壊 残存部分等の調査
	*	*	*	病理解剖実験器処理保管 庫新設	岡山市教育委員会			
*	*	医	運動場改修	*				
1982	津 島 AV 05-10 AW 05-14 AY 08, BD 07 BE 10	試験		排水基幹整備	*			津島 AW 14区で休止時代包含 層を確認、協議
	小橋法昌型 津島北 AW 14	探掘	法文	排水管集中槽(NP-1)埋 設	岡山大学	24.0	③	
	津島南	試験	学生	武道館新設	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北 AY 15-16	*	法経	教舎新設	*	7.0		
	鹿 田	*	医	標本保存庫新設	岡山県教育委員会	8.0		
	*	*	医病	外来診療棟新設	岡山市教育委員会	4.0	2	
	*	立会	医	動物実験施設関連排水 管・ガス管埋設	岡山県教育委員会		1	
	鹿 田 AE~AN 22 AE 22~26	*	畜	電話ケーブール埋設	岡山市教育委員会 岡山大学学蔵文化 財調査室			

※文献1 元水典、「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新設工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983 岡山県教育委員会

2 河本 清「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983 岡山県教育委員会

③ 番号は附表3の番号に対応する。

附表2 1987年度以前の構内主要調査(1983~1987年度)

附表2-(1) 発掘調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	期 間	面積(m ²)	備 考	文献
1983	鹿 田 AU~BD 28~40	医病	外来診療棟新設	7.27~11.22 84.1.9~3.31	2188	発土時代中期後半~中・近世集落址	①
	* BC~BI 18~21	*	NMRCT 空新設	8.1~12.30	176	発土時代後期~中世集落址	*

年度	調査地区名	所属	調査名称	期 間	面積(m ²)	備 考	文献
1983	津島南 BE 14-18 BF 17・18, BG 14 BH 14-15	農	排水管理施設	84.1.9-3.5	265	縄文時代晩期-弥生時代前期集落址	④
	* BH 13	*	合併処理槽建設	11.14-11.22 84.1.9-3.5	276	* - *	*
1984	鹿 田 AU - BD 28-40	医療	外来診療棟新築	4.1-8.31	2188	弥生時代中期後半-中・近世集落址	⑦
1986	* CN - CU 27-28 CT - CY 19-27 CX - DD 16-25 DD - DG 22-23	医療	校舎新築	6.2-11.29	2390	古代-中世の集落址	⑥
	津島北 AV 00, AW 00-01	学生	男子学生寮新築	12.1-87.3.31	1550	近代-古代の木田址	*
	津島南 BF・BG 09	*	館内運動場新築	87.1.19-1.22	70	弥生時代前期溝, 中世河道跡出	*
1987	津島北 AV 00 AW 00-01	*	男子学生寮新築	4.1-6.18 8.24-9.5	1550 80	弥生-縄文晩期の集落址 縄文晚期-後期の河道	⑧
	鹿 田 BB - BU 35-42	医療	管理棟新築	10.6-88.3.2 88.3.23-3.31	1192	弥生中期後半-中・近世の集落址	*
	* DD - DF 25 DG - DI 27-28	医療	校舎周辺の配管	11.2-11.24	30	古代の河道	*

附表 2-(2) 試掘調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度 (m)	備 考	文献
1983	津島南 BH 13	農	合併処理槽予定地	2.5	弥生時代前期土器片 (1983年度発掘調査)	①
	* BE - BG 14 BE・BH 15 BF 16-17 BE・BF 18	*	排水管理施設予定地	2	* (*) *	*
	* BF 17	*	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5		*
	* BF 22-23	*	農場倉庫新築予定地	2-3	土器片出土。 (1987年度工事立会)	造成土0.6m *
	* BC・BD 15	事務	大学事務局新築予定地	*	土器片出土。	* 0.9m *
	* BB 10	学生	保健管理センター新築予定地	*	溝検出。	* 0.8m *
	* BI 16	事務	津島庁舎新築予定地	2	土器片出土。 (1987年度工事立会)	* 0.9m *
	津島北 AW 05	工	校舎新築予定地	3	土器片出土。	* 1.0m *
1984	鹿 田 BY 30-31	医療	西病棟北側受水槽予定地	1.4	中世土器・包含確認。 (盛土保存)	* 0.5-0.7m ⑤
	* CT・CU 25 * CZ19-20-23-24	医療	校舎新築予定地	2.7	中世・古代の遺物出土。 (1985年度発掘調査)	* 0.8-1.0m *
1985	津島南 DE 08	教養	講義棟予定地	3.5	遺構・遺物未確認。 (1986年度工事立会)	* 1.2m ⑤
	津島北 AX 02	教育	研究棟予定地	2.6-3.4	縄文-弥生時代土器出土。	* 1.2m *
	* AV・AW 99-04	学生	男子学生寮新築予定地	2-3	縄文-中世の遺構・遺物。 (1986年度発掘調査)	* 1.0m *
	鹿 田 AJ 33, AI 40 AJ・AK 26	医療	外来診療棟増築整備工事にあつた範囲確認調査	2.2-3	弥生-中世の遺物。	* 0.9-1.4m *

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度 (m)	備 考	文献
1986	津島南 BF・BG 09	学舎	屋内運動場新営予定地	2.4 1.2-1.7	弥生前期遺・中世河遺検出、造成土1.1m (1986年度発掘調査)	⑤
	津島北 AY・AZ 07	大	自然科学研究所棟新営予定地	1.6-3.2	縄文中期末-後期の遺構・遺物検出 造成土0.6-0.8m (1988年度発掘調査)	*
1987	土 生 AP 02	事務	外国人宿舎建設予定地	2.2-2.8	刃土・弥生・縄文の遺構面確認	⑥
	津島北 AV 11	情セ	情報処理センター新営予定地	2.0-3.0	関色土を標高2.2m前後で確認。遺構は未検出 造成土2m	*
	AY 09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0-3.5	近世・中世の遺物、中世・古代の水田址 造成土約1m (継続して発掘調査に及ぶ)	*
	津島南 BD 09	教養	*	2.5	縄文時代土層群を確認 縄文・中世・近世土層由上。造成土0.7m (継続して発掘調査に及ぶ)	*

附表 2-(3) 立会調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度 (m)	備 考	文献
1983	東山	教育	附属中学校改築予定地	4-5	シルト層中	①
	廣 田 AR・AS 38, BC 40	医病	外来診療棟及び耳鼻科棟基礎状況保存状況確認調査	2.5-3		*
	津島北 AX 15	文	中庭水銀貯池トケール埋設	0.7	造成土中	*
	廣 田 AY 23	医病	旧中央診療棟埋設給水管修繕	1	*	*
	AM 32	*	外来診療棟シールド取付に伴うアース埋設	2		*
	DC 30-42	*	プール周辺植樹作業	0.7	造成土中	*
	AO-AW 22	*	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	弥生後期土器(分銅形土製品)、貝集積	*
	津島南 BC-RF 18	薬	風呂排水用集中埋設 水道管埋設	2.5 1.5		*
	津島北 BA 13	事務	内門橋梁改修	2.6		*
	廣 田 BH 17-18	医病	混合棟北側ガス埋設	1	造成土中	*
1984	廣 田 DG・BH 17-18	*	NMR-CT 室新設関係排水施設取付	0.6-1.5		②
	BD-BH 64	医	旧基礎医学棟中庭駐車場整備	0.8		*
	津島北 AW・AX 11 AZ・BA 12・13	情セ	通信用管路埋設	0.7-1.4	造成土0.9-1.2m	*
	廣 田 AR 36	医病	外来診療棟改築関係電気架設	1.95	* 1.25m	*
	BQ 33	*	中診北病棟外来リカバリー室医療機器取付	1.6	* 1.5m	*
	BT 21	*	附属検査棟埋設ガス管修繕	0.8	造成土中	*
	DB 29	*	看護婦宿舎排水管修繕	2.0	中世包含層確認、中世・弥生土器出土 造成土1.15m	*
	津島南 BI 16	事務	非常動調室の施設新設	1.6	* 1.0m	*

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度 (m)	備 考	文献
1984	津島南 BH 15	事務	寄宿舎合併処理槽取付	2.0		②
	◦ BH 13-17	◦	寄宿舎合併処理槽関係配水管埋設	1.0-2.2	溝・土壌検出、須臾器・汚生土器出土 造成土1.0m	◦
	鹿 田 BA 16-22	医師	外来診療棟関係ガス管引込み工事	1.2-1.4	ほとんど造成土	◦
1985	◦ AW ~ BH 23 BH ~ BU 24	◦	外来診療棟関係外排水管埋設	1.3-1.7	造成土0.7-1.3m 中層・表生の遺構・遺物確認	③
	◦ CR 69	◦	看護学校構内水道メーター取設	1.0	造成土中	◦
	◦ AK ~ AM 43-46 AO ~ AT 42地	医	基幹環境整備給排水その他工事	1.0	造成土0.8m、近世土器留り検出	◦
	◦ AU ~ AW 40 BA 40-42	医師	基幹環境緑化工事、外来診療棟西	1.1	◦、中世包含層確認	◦
	◦ AG 34-36 AL ~ AN 31-39 AU ~ AS 39	◦	◦、外来診療棟北	1.1	◦、◦	◦
	◦ BA 22地	◦	基幹環境整備給排水その他工事	1.15	造成土1.0m	◦
津島北 AV 06-07	工	三次元線新設関係排水管埋設 三次元線建設	1.5-1.7	◦ 1.0-1.5m、土器細片出土	◦	
1986	鹿 田 CS-CT19-24 CM-CU 12-13 CR 14, CU-CW 15 CW-CZ 16, CH 33	医師	樹木移植	0.8-1.5	◦ 1.0m	④
	◦ BI ~ BN 45	医	排水・汚水管改修	0.8-1.3	◦ 0.8m	◦
	津島南 BE 08-09	教養	校舎新築	2.3	◦ 1.3m、中・近世土器・溝検出	◦
	鹿 田 BV 10, CY 29 DD 29, CK 27 CL ~ CW 26-29	医師	◦ 設備	0.5-1.2	◦ 0.8-0.9m	◦
	津島北 AU 04-16-17 AV 15	文	樹木移植	1.0-1.6	造成土内	◦
	◦ AV 16-17	◦	グラウンド改修	3.5	造成土1.5m	◦
	津島南 BG 08	学生	ハンドボールコート新設	0.2-2.0	◦ 0.8m、黑色土確認	◦
	津島北 AX 16	文	動物実験室新設	0.95	造成土内	◦
	鹿 田 CL ~ CR 12 CR ~ CX 13 CX ~ DA 14	医師	濠洋及び四脚工事	2.0	造成土0.8-1.0m、中世包含層	◦
	津島南 BP 07-08	教養	校舎新築に伴う電気配管	1.8	◦ 0.3m、◦	◦
1987	鹿 田 BC 37	医師	管理棟給水に伴う基礎杭確認	2.5	其中時代包含層・遺構確認	⑤
	津島北 AY 09	理	身体障害者エレベーター設置 に伴う汚水管移設	1.2 一部1.6	造成土1m前後	◦
	津 島 AQ 02-03	事務	土生衛命館外排水管改修	0.7	造成土0.6m	◦
	津島北 AW 01	学生	馬場東給水管修理	2.0	◦ 0.96m、谷部分	◦
	鹿 田 CW 14-17	医師	校舎新築 配管	1.3	◦ 1.16m、中世水田層	◦
	◦ DC ~ DE 23	◦	◦ ◦	1.9	◦ 1.1m、撥乱内	◦
◦ CW 16	◦	◦ 樹木移植	1.2	◦ ◦	◦	

附 表

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度 (m)	備 考	文献	
1987	鹿田 DF 24 DG 24-26	医短	校舎新営 樹木移植	1.6 3.0	造成土1.1m 中世層確認 * * * 掘削内	⑤	
	* DD-DF 24 DF 23-24	*	* * *	1.38 1.8	* * * * * *, 中世層確認	*	
	津島南 BH 22-23	農	農家施設新営 その他工事	施設新営	1.8	* 1.25m	*
	* BG 22	*	* * *	倉庫処理槽	3.6	* 1.2m, 自然成路内	*
	* BE 17-21	*	* * *	電気	0.7-1.5	* * *	*
	* BE 22	*	* * *	給排水	3.0	* 1.3m	*
	鹿田 BA 17-21	医病	旧混合病院北軒駐車場築設		0.6	造成土内, 衛生土器出土	*
	* CM-CN 30-43 * CC-CN 45-47	*	* * *	道路排水整備	0.7-1.1	* , 深度1.1m地点のみ造成土65cm	*
	* CH-CI 56-57	医	* * *	動物実験施設視認印再部強固	1.0-1.2	造成土0.8m	*
	* * *	*	* * *	配管	0.3-1.0	* * *	*
	* CM 13-26 * CN-CQ 14 * CP-CI 14 * CO-CR 26-27	医病	* * *	近代暖房北給水管改修	0.8-0.9	* * *	*

* 発掘・試掘調査については全てを、立会調査については主要なもののみを対象としている。
文献番号は附表3・4に対応する。

附表3 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名 称	発行年月日
①	岡山大学構内遺跡調査研究年報 1 1983年度	1985年2月28日
②	岡山大学構内遺跡調査研究年報 2 1984年度	1985年3月30日
③	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡 (AW 14区) の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月7日
④	岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ (農学部構内BH 13区他) 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月31日
⑤	岡山大学構内遺跡調査研究年報 3 1985年度	1987年3月31日
⑥	岡山大学構内遺跡調査研究年報 4 1986年度	1987年10月31日

附表4 埋蔵文化財調査センター刊行物

番号	名 称	発行年月日
⑦	鹿田遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊	1988年3月31日
⑧	岡山大学構内遺跡調査研究年報 5 1987年度	1988年10月31日
⑨	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号	1988年10月

附 編

竪穴系横口式石室小考

一筑前地方を中心にして一

土 井 基 司

はじめに

横穴式石室の型式学的研究は尾崎喜左雄と白石太一郎によって本格的に始められた⁽¹⁾。須恵器の編年的研究が未発達だった当時においては、古墳時代後期を理解する手段として最も重要なものの1つだった。しかし、須恵器をはじめとする遺物の研究の進展とともに、その比重は次第に低下していき、研究もしばらく停滞した様相を示していた。ところが近年、横穴式石室への関心が高まってきて、地域別研究が盛んになってきた。その中でも北部九州では早くから横穴式石室の研究が進んでおり、特に地域的特性からその導入についての研究が盛んである。いわゆる「竪穴系横口式石室」や初期の横穴式石室の型式変化、構造及び源流の問題などがおもに論じられている。しかし、未だ竪穴系横口式石室や初期横穴式石室の定義については、大まかには一致しているものの完全には定着していない。その原因は、どの属性を重視するか研究者ごとに異なることにある。やはり、どの属性が最も有効かを総合的に検討して分類しなければならないだろう。北部九州での混乱は、韓国での研究状況と相まって、その源流の問題を複雑にしている。また、日本国内での系譜問題についても、その混乱がそのまま他地域に反映されている。問題の解決には、各々の地域での各石室形式の厳密な定義が前提条件となろう。さらに、近年盛んな石室の型式学的検討を行うためにも、形式の設定が重要な問題になると考える。本論では、その基礎作業として、先学の研究を参考にしながら、まず北部九州の竪穴系横口式石室の定義について新しい案を提出し、横穴式石室の型式学的研究への第一歩としたい。

研究史

九州地方の横穴式石室については早くから注目され、樋口隆康や小林行雄によってその導入が畿内に先行することが指摘されていた⁽²⁾。しかし、当時の資料的制約もあって、その関心は九隈山古墳や横田下古墳などのいわゆる「大陸系」の石室に向いていた。それに対して白石は、竪穴系横口式石室を含む「特殊な横穴式石室」に注目し、これらを従来の伝統的墓制に横穴式石室のアイデアを取り入れたものとして位置づけ、5世紀代における畿内とは異なった古墳文化の変容を表すものと評価している⁽³⁾。その後、調査例の増加とともに、特殊な葬制とみられがちだった竪穴系横口式石室に対するこのような積極的評価は定着していった。また、賀川光夫と小田富士雄は、この種の石室に「竪穴系横口式石室」という語を初めて使用し、現在で

はこの名称に統一されている。しかし、歴史的評価と名称の統一にも係らず、その定義についてはまだ統一されているとはいえない。以下その状況を概述する。

山中英彦は、初期の横穴式石室を「大陸系横穴式石室」と「竪穴系横穴式石室」にわけて、大陸系に対して竪穴系が相違する点として、明確な羨道を持たない、天井石が石室床面にはほぼ平行している、側壁が割石小口積みで施朱されることが多い、墳丘の上部に構築される、などを挙げている⁽⁹⁾。前の2点はその後も継承されていく指摘であるが、後の2点は必ずしも両者を分ける基準とはなり得ない。尚、大陸系横穴式石室の標式として丸隈山古墳や横田下古墳を挙げている。ついで柳沢一男は、狭長なプラン、羨道が無い、側壁が割石小口積みや塊石積み原則とする、閉塞はすべて横口部で行う、と形態上の概念を規定している⁽⁶⁾。特に羨道の有無を最も大きな違いとしている。しかし、条件付きながら前壁と掘石を持つものも竪穴系横口式石室に入れたため、その定義が曖昧になり、初期の横穴式石室のほとんどがそのなかに含まれることになってしまった。その結果、竪穴系横口式石室の位置づけがかえって不明瞭なものになっている。その後柳沢は、竪穴系横口式石室の概念上の混乱は、そのなかの位相の違いを考慮しないことから生じるとして、A型とB型の2つのレベルに分類した⁽⁷⁾。前者が大形古墳、後者が小形古墳に採用され、それぞれ別個の変遷過程を辿ると考えた。初期の横穴式石室全体を捉える上での視点としては優れたものであったが、定義上の曖昧さは残されたままであった。さらに柳沢は、後述する蒲原の説を受けて、勤崎古墳、丸隈山古墳の調査報告中などで前説を大幅に修正した⁽⁸⁾。つまり、B型石室のみを竪穴系横口式石室とし、A型石室を北部九州型とした。その結果、老司古墳3号石室は竪穴系横口式石室の範疇からはずしている。

一方、小田富士雄は九州の横穴式石室について「竪穴系横口式石室」「横口式家形石棺・石棺式石室」「横穴式石室」の3つにわけている。「横口式家形石棺・石棺式石室」は江田船山古墳のような横口式家形石棺を直接封土に埋めたものや石人山古墳のような覆屋ふうのものを指している。「横穴式石室」はさらに「小坂大塚タイプ」、「横田下タイプ」、「箱形石室」にわけている。竪穴系横口式石室には老司古墳3号石室とそれに後続する丸隈山古墳をふくめているが、さらに発展した釜塚古墳は横穴式石室と捉えている。また、小形古墳に採用される竪穴系横口式石室も同様に横穴式石室へと移行していくとして、竪穴系横口式石室の定義を狭義に行うべきだと述べている。蒲原宏行も竪穴系横口式石室をより精密に定義した上でその展開を検討すべきだと主張し、前壁・掘石の有無を大きな指標として竪穴系横口式石室を定義している⁽¹⁰⁾。そして、前壁を持たない構造的な限界によって玄室高が1.4mをこえないこと、主軸平行葬のため玄室幅が1.4mをこえないことを基本的特徴として指摘している。しかし、老司古墳3号石室は例外的にその中に含めている。

土生田純之は初期の横穴式石室についての諸説をまとめている⁽¹¹⁾。基本的には小田の論を踏

使しているが、九州での横穴式石室の受容のあり方とそのほかの地方の受容のあり方の共通性を指摘しており興味深い。つまり、首長墓系統に初めて横穴式石室が採用されその影響下で小形古墳にも採用されていくという現象が関東地方でも認められると述べている。森下浩行は、新たな視点から整理を試みている⁽⁹⁾。まず、初期の横穴式石室を九州型と畿内型に大別し、九州型をさらに北九州型と肥後型に分類したうえで、北九州型と畿内型はそれぞれA類とB類に細分している。北九州型B類(堅穴系横口式石室及びその系譜をひく石室)については、A類の二次的な影響によって在来の小形堅穴式石室に横口部を取り付けた結果成立したと考えているが、そのほかのものはそれぞれ朝鮮半島南部からの多元的導入を推測している。しかも最初の導入時だけでなく、数度にわたっての影響を想定している。九州以外から出されたこれらの論考はこれまでの研究をさらに進展させる上で注目すべきものだろう。

最後に、林日佐子は朝鮮半島南部の「堅穴系横口式石室」との関連から日本の堅穴系横口式石室を考えようとして型式分類しているが⁽¹⁰⁾、現在のところ二者を積極的に結び付ける材料はなく、小田が言うように類似現象と捉えるべきだろう⁽¹¹⁾。ただし、従来混同して用いられてきた羨道の概念について、明確に天井石を架構しないものは羨道とすべきでないとしたのは画期的であった。

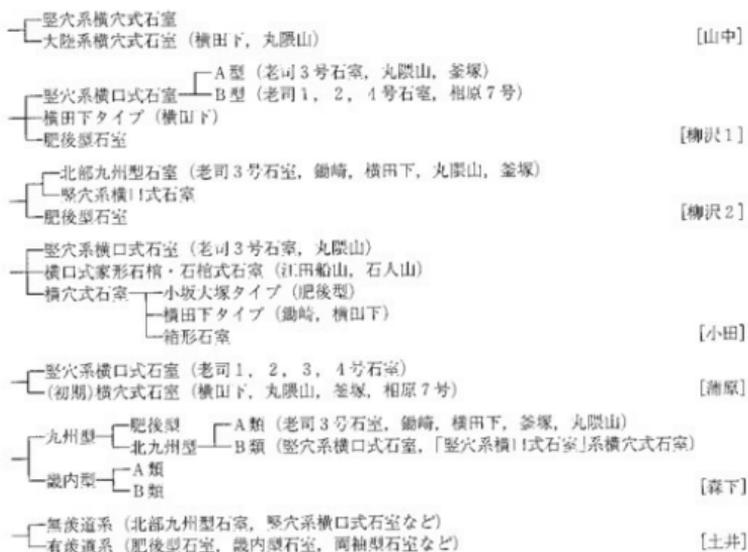


図1 各研究者の石室分類

さて、以上の先学の説をまとめたのが図1である。ここで問題になるのは第1に老司古墳3号石室、九隈山古墳の属属だろう。柳沢、森下は2つとも竪穴系横口式石室にいえず、蒲原は老司古墳3号石室のみ含み、小田は両者とも竪穴系横口式石室と考える。筆者は、柳沢、森下の説を採る。なぜなら、両者とも構築技術からみて簡崎古墳や横田下古墳、釜塚古墳につながっていくが、小形古墳に採用されている竪穴系横口式石室にはつながっていないからだ。平面形からいっても、幅広な老司古墳3号石室などと狭長な他の竪穴系横口式石室とは違いが大きすぎる。第2は分類の方法に関する問題だ。小田の「横口式家形石棺・石棺式石室」をのぞけば、分類単位にそれほどの違いはない。大きな相違点は分類単位の間の関係だ。柳沢は北部九州型と竪穴系横口式石室を合わせて肥後型に対応させ、森下はそれをさらに畿内型に対応させている。小田は北部九州型や肥後型を合わせて竪穴系横口式石室に対応させている。小田は竪穴系横口式石室は横穴式石室にいたる過渡的なものという点を重視しているが、構造的差異、その成立の様相を考えると柳沢の分類の方が妥当に思える。しかし、肥後型石室は、羨道を持っている、方形プランである、などの点から、むしろ畿内型の一部との類似性の方が強いと思われる⁽¹⁹⁾。

以上の考えを図1の最後にまとめている。以下ではこれに基づいて具体的な資料操作を進める。尚、資料操作に当たっては、筑前地方をおもに取り上げながら北部九州の初期横穴式石室について考えていきたい⁽²⁰⁾。

横穴式石室の分類

竪穴系横口式石室を他の横穴式石室から分離して定義する場合、比較する対象は2つある。1つはその他の初期横穴式石室（北部九州型石室）、もう1つはいわゆる通有の横穴式石室（両袖型石室）である。また研究史から見て、竪穴系横口式石室の特徴は、狭長なプラン、羨道が無い、前壁が無い、横口部を板石で閉塞、などがあげられる。このうち、狭長なプラン、前壁の有無は前者と区別する特徴で、羨道の有無や横口部の閉塞法は後者と区別する特徴である。本論では前述したように羨道の有無をもって大別し、それから細分するという方法を探る。つまり、初期横穴式石室と両袖型（横穴式）石室にまず大別し、それから北部九州型（初期横穴式）石室と竪穴系横口式石室を分離することにする。分類の方法としてはいわゆる属性分析を用いる⁽²¹⁾。

①初期横穴式石室の抽出

羨道の有無と閉塞法を主要な属性と考え、それと他の属性（袖の構築法、墓道、段）との相関関係を求めて分類をおこなう。

羨道 (図8参照)

本論でいう羨道は、林が言ったように¹⁰⁶、前庭側壁とは区別して、天井を架したのみを指す。さらに玄室入口にのみ天井石を架したようなものは指さない。例えば、鎌崎古墳、横田下古墳のいわゆる羨道は、玄室入口にのみ天井石を架していると考えて、羨道には入れない。鎌崎古墳の石室は、長大な掘り方のなかに石室を構築している点で竪穴式石室の構築法に近く、玄室入口前に広がる石組はむしろ石室小口壁の一部を取り除いた結果であると考えられ、道ではなく入口と捉える方が合理的だろう。釜塚古墳の場合も、玄室入口の天井石が単に外側にはみ出しただけと考えて羨道には含めない。以上の定義にしたがって、羨道のあるものと無いものの2つに分類する。

閉塞法 (図8参照)

I類 横口部に板石を立てて閉塞するもの。1枚の板石を用いるものをI a類、複数の小形の板石を数段に分けて立てかけるものをI b類とする。I b類には板石の背後に塊石を積んで支えるものを含む。

II類 塊石で閉塞するもの。

袖の構築法 (図8参照)

0類 袖部を形成しないもの。

1類 板石小口積み、塊石積みで袖部を形成するもの。板石小口積みを1 a類、塊石積みを1 b類とする。

2類 板石を立てて袖部を形成するもの。その上に数段の石を乗せたものが多い。

3類 おおぶりの石を立柱状に立てて袖部を形成するもの。その上に2、3段積み上げて天井石をおくものと、直接天井石をおくものがある。

4類 おおぶりの石を2、3段横積みするもの。

墓道 (図8参照)

0類 墓道が接続しないもの。

1類 墓道が斜めに上がって行くもの。

2類 墓道が水平に続き墳丘端にいたるもの。

段 (図8参照)

段の有無で分類する。

上記の各属性の分類について、羨道は無→有、閉塞法はI→II、袖の構築法は0・1→2→3・4、墓道は0→1→2、段は有→無という変化の方向を研究史及び石室構造の発達の方向から想定する。以上に基づいて相関関係をとったのが図2である。まず羨道と閉塞法の相関関係から見ると、いくつかの例外をのぞいて左上と右下にわかれている。また、羨道、閉塞法と

羨 閉	I a	I b	II
無	24	40	1
有	1	1	94

羨 臺	0	1	2
無	12	56	57
有			205

羨 段	有	無
無	86	45
有	1	221

羨 袖	0	I a	I b	2	3	4
無	7	6	14	46	49	14
有				8	167	41

閉 臺	0	1	2
I a	3	9	4
I b	1	18	23
II	1		28

閉 袖	0	I a	I b	2	3	4
I a	3	3	3	7	5	3
I b	1	3	5	10	16	11
II	1			2	76	15

閉 段	有	無
I a	20	5
I b	28	13
II	1	94

図2 各属性相関表(1)

その他の属性との相関関係を見ると、羨道有と羨道無とは違った特徴をしめしており、I類とII類とでも同様である。このことは羨道と閉塞法が主要な分類の基準たりうることを示すと同時に、さきに想定した変化の方向の有効性も保証している。つまり、筑前地方の横穴式石室は、羨道がなく板石で閉塞する古式のもの＝初期横穴式石室と、羨道があり塊石で閉塞する新式のもの＝両袖型(横穴式)石室の2つに分類することができるわけである。

②初期横穴式石室の分類

①のようにして初期横穴式石室が抽出されたが、次にそれを分類して竪穴系横口式石室を取り出し定義する。方法は①と同様に各属性間の相関関係を求めてそれをもとに分類する。平面形と前壁の有無を主要な属性として取り上げ、そのほかに袖の構築法、墓道、段を取り上げる。平面形(図3参照)

平面形の分類にあたっては玄室比と玄室幅を参考として用いた。玄室比は(左側長+右側長)/(奥幅+前幅)で計算した。縦軸に玄室比、横軸に玄室幅をとって点をおとしたのが図3である。点の分布を見ると、幅1.9m以上で玄室比1.0~2.2付近のもの、幅1.2m以上で玄室比1.0~2.5付近のもの、幅1.2m以下で玄室比1.7以上のもの、の3つに分かれる。これを仮に順にA群、B群、C群と名付ける。A群は大きくて幅広なので幅広プラン、B群は小さくて幅広なので短小プラン、C群は小さくて細長いと言うことで狭長プランといいかえることができるだろう。尚、幅1.6~1.7付近で大きく上に外れた点があるがこれはB群にいれておく。

前壁(図8参照)

玄室入口上部に、石材を積み上げて壁を構築したものを前壁と呼ぶ。鍋崎古墳や横田下古墳

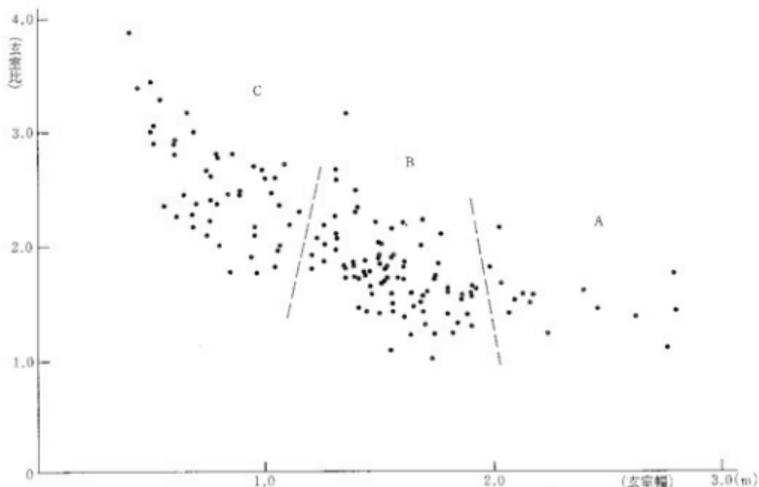


図3 平面形分類

も僅かだが玄室入口の上に石材が積まれており前壁有りとなす。このような基準で前壁の有るものと無いものに分類する。

袖の構築法、墓道、段は①と同じ。

以上の分類にしたがって相関関係をとったのが図4である。平面形と前壁の相関関係を見ると、A群とB群が前壁有、C群が前壁無にほぼ対応している。C群には前壁有がかなり含まれているが、この種の小形の石室で天井石まで残っているのは非常に少なく、これらがはたして例外的なものとして捉えられるかどうかは不明である。一応ここではC群は前壁無に対応するとしておく。次に平面形、前壁と他の属性の相関関係を見ると、A群、B群、C群でそれぞれ対応の仕方が異なる。蒲原は前壁の有無を重視して竪穴系横口式石室を抽出したが、この種の石室で上部まで残っているものがほとんど無いことを考えると、個別の石室をどう認識するかという点で問題がある。したがって、以上の結果から前壁の有無も重要な指標として考慮するが、平面形を最も重視して分類を行い、A群を北部九州型(初期横穴式)石室A類、B群を北部九州型石室B類=無羨道型(横穴式)石室、C群を北部九州型石室C類=竪穴系横口(型横穴)式石室と名付ける。

これまでの検討により筑前の横穴式石室は図5のように分類される結果となった。もう1度竪穴系横口式石室についてのみ説明すると、羨道がなく、板石を用いた閉塞を行うもので、幅1.2m以下、玄室比1.7以上の前壁の無い石室ということになる。その特徴としては、段を有し、

平前	無	有
C	8	4
B		32
A	1	7

平墓	0	1	2
C	10	20	6
B	1	32	47
A	1	4	4

平段	有	無
C	32	7
B	44	38
A	10	

平袖	0	1 a	1 b	2	3	4
C	7	6	11	24	3	
B				21	41	14
A			3	1	5	

前墓	0	1	2
無	1	15	1
有		16	24

前袖	0	1 a	1 b	2	3	4
無	1	1	2	6		
有	1	3	2	12	13	7

前段	有	無
無	8	4
有	19	18

図4 各属性相関表(2)

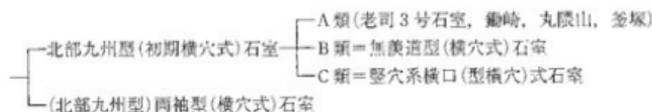


図5 横穴式石室の分類

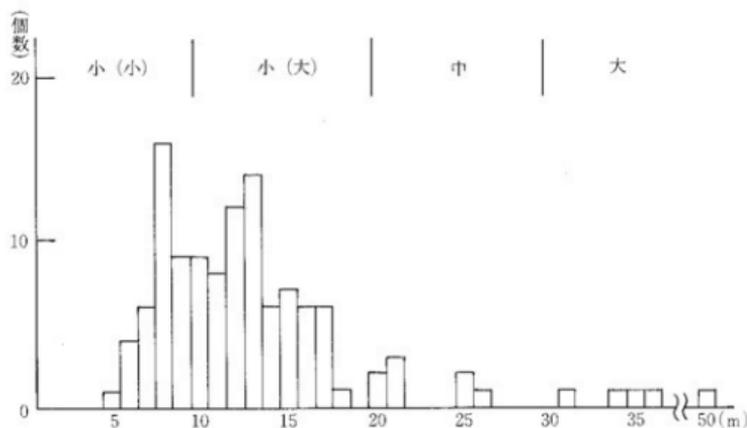


図6 円墳の大きさ

墓道は斜めにはいるようになってるのが一般的で、塊石積み（板石積み）あるいは板石を立てて内側に突出させて袖部を形作るものが多い、などが挙げられる。

まとめ

上述のようにして竪穴系横口式石室をはじめとする初期横穴式石室が分類されたわけだが、それらの各石室群が全体の中で占める位置について若干考えてみたい。

柳沢は前述のように初期横穴式石室をA型（北部九州型）とB型（竪穴系横口式石室）にわけ、その差を階層差に求めた。つまり、A型は前方後円墳や大形円墳に、B型は中小古墳に採用されると考えた。本論ではA型はA類、B型はB類、C類にだいたい対応する。そこで各石室群とそれが採用される古墳の墳形、墳長との関係を見る。筑前地方の該期の円墳の大きさについて度数分布をとると（図7）、約30m以上が大形、20m前後～30mが中形、17.8m以下が小形というふうにならべ、さらに小形は10mぐらいをさかいに2グループにわかれる。これを基に墳形・墳長を前方後円墳、大形円墳、中形円墳、小形円墳(大)、小形円墳(小)の5段階にわけ、各石室群との対応関係を見ると、図7のような結果になる。これを見ると、大枠では柳沢のいうような関係が成り立つといえる。A類は前方後円墳と大形円墳、B、C類は中、小円墳とほぼ対応している。大、中円墳の部分はB類とA類で若干重なっているが、墳長の大きさは各地域ごとで相対的に変わってくるので、大きさを単純に比較できない面もあるだろう。さて、初期横穴式石室にみられるこのような階層差は、両袖型石室になっても基本的には存在する。また横穴式石室採用前の竪穴系墓制の段階でも存在する。このことは横穴式石室の採用によっても古墳時代の基本的社会体制、墓制によって社会関係を象徴させる体制というものに大きな変化はなかったことを表している。この時期は古墳文化がかなり変質していて、各地で地域性が現れてくることも考慮すると、その地域性の1つとして横穴式石室が北部九州に一般的に採用されたと考えることもできる。そう考えると、北部九州型初期横穴式石室の採用とその広範囲にわたる分布が、畿内地方を中心とした体制からの離脱＝九州連合政権的なものには直接にはつなげていかないように思える。もっとも、横穴式石室の分析だけでその正否を語ることは不可能なのでここではこれ以上ふれない。

B類とC類については、傾向としては小形(大)と小形(小)にそれぞれ対応するが、小形(大)と小形(小)が判然と分離できないことを考えると、階層差と考えるには若干無理があるように思う。むしろ、竪穴系横口式石室が前壁を持つと同時に法量が増大して、継続する墓制へと変化したと蒲原

墳形	石室形式		
	A	B	C
前方後円墳	6		
大形円墳	1	1	
中形円墳	3	4	
小形円墳(大)		47	10
小形円墳(小)		18	24

図7 石室形式と墳形

が考えたように、B類とC類の関係を時間的変化として捉えたほうがいだろう。墳丘の大きさの違いも、石室の法量の増大の結果と考えれば納得がいく。ただし、C類からB類へとスムーズに変化するかどうかは明らかではない。蒲原や森下の研究成果を見ると、2つの石室群の共存する期間はかなり長期間あるようだ²²⁾。しかし、土生田が指摘しているように、古墳の年代、特に横穴式石室の年代を決定するに当たってはかなり慎重な手続が必要だ²³⁾。それを考慮して個々の石室の年代を決定し、それから各石室群の存在期間を推測しなければならないだろう。今回は、力量不足で個々の石室の年代について再検討を行うにはいたらなかったので、B類とC類の関係については今後の課題とする。

ところで、北部九州型石室B類と両袖型石室の各属性の特徴を比べてみると、かなり似た状況を示していることが図2と図4からわかる。このことは、B類がその最終段階において、両袖型石室の特徴のうち羨道以外のほとんどの特徴を備えていることを意味している。つまり、両石室群の技術的連続性を強くうかがわせる。ところが、羨道の付設や閉塞法の違いは、全く異なった石室との印象を与える。これは、羨道を持った他の石室からの影響を絶えず受けながら、限りなく両袖型石室に近づき、技術的には両袖型石室の築造が可能だったにもかかわらず、なお中、小古墳に北部九州の伝統を存続させる意識が残っていたことを推測させる。それが後期群集墳の形成の開始とはほぼ同時期に両袖型石室に変化するのは、2つの事象との間になんらかの関連性を感じさせる。首長層への両袖型石室の採用の影響を受けて、中、小古墳でも採用されるようになって考えられるが、それが全国的に普遍的な群集墳と関連するのであれば、首長層でのその採用も、壱井の乱などの個別の事件と関連させて考えるより、全国的な現象の中で理解するのがよいだろう。例えば、古墳文化の再整理を目的として、石室形式の統一が全国的に行われたのではないとも考えられる。

以上、堅穴系横口式石室の定義をおこない、それを基にして北部九州の初期横穴式石室について若干の考察をおこなってきたが、当初の構想に反しどれも中途半端で、課題だけが数多く残った。今後、本論を基礎として研究を進め、それらを1つずつ解決していきたいと思う。

	古墳名	羨道	閉塞	平面	前壁	袖	竪道	段	報
1	錦崎古墳	無	I a	A	有	1 a	1	有	1
2	丸隈山古墳	無	I a	A	—	1 a	1	有	2
3	笠塚古墳	無	I a	A	無	2	1	有	3
4	浦谷C1号墳	無	II	C	無	0	0	—	4
5	浦谷I1号墳	無	—	C	—	1 b	1	有	4
6	浦谷B3号墳	無	I a	C	無	2	1	有	4
7	宇美岩長浦4号墳	無	I b	B	—	3	1	有	5
8	相原7号墳	無	I b	B	有	2	1	有	6
9	三郎堂の上2号墳	無	I b	B	有	4	2	無	7

図8-a 石室一覧表

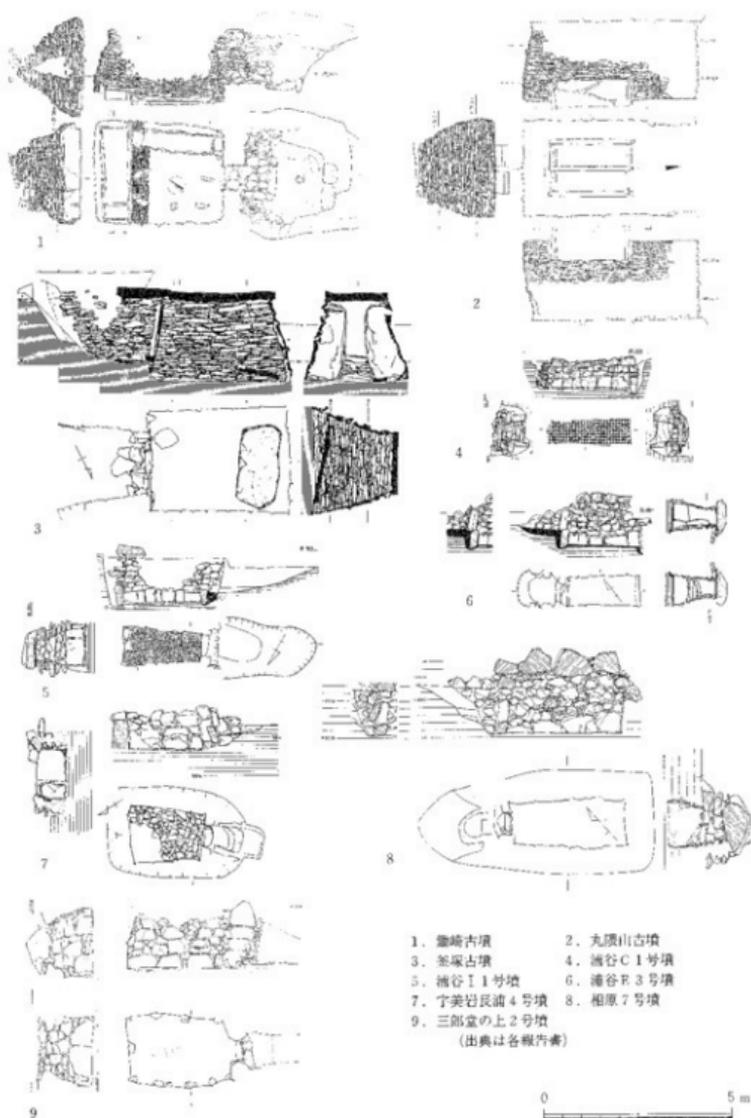


図8-b 各石室実測図 (縮尺1/130)

本論は、1987年度修士論文として九州大学に提出したものの一部を大幅に修正して書き上げたものである。論文作成にあたって、岡崎敬、横山浩一、西谷正、藤原慎一郎の各先生がたをはじめ、考古学研究家の皆さん、なかでも郭鍾誥、尹煥、宮井善朗、吉野徳久、溝口孝利、中園聡、太田謙の各氏（当時）、及び、柳沢一男、橋口達也、田崎博之、吉野秀敏、山田元樹の各氏には、日頃から多大な御指導、御教示をいただいた。また、近藤義郎先生、新納泉先生には、本論をまとめるにあたって、諸々の御助言をいただいた。末筆ながら記して篤く感謝いたします。

註

- (1) 尾崎善左雄 1962 「横穴式石室平面図形の企画」『考古学雑誌』第48巻第4号 考古学会
1966 『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 白石太一郎 1966 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考—河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として—」『古代学研究』第42・43合併号 古代学研究会
- (2) 橋口隆康 1965 「九州古墳墓の性格」『史林』第38巻第3号 史学研究会
- 小林行雄 1961 「中期古墳文化とその伝播」『古墳時代の研究』青木書店
- (3) 白石太一郎 1965 「日本における横穴式石室の系譜—横穴式石室の受容に関する一考察—」『先史学研究』5 同志社大学先史学研究会
- (4) 賀川光夫・小田富士雄 1962 「七双了古墳群」大分県文化財調査報告書第8集
- (5) 山中美彦 1965 『稲童古墳群第二次調査抄報』畿内古文化研究所
- (6) 柳沢一男 1975 「北部九州における初期横穴式石室の展開—平面図形と尺度について—」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会
- (7) 柳沢一男 1982 「壱穴系横穴式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻 森貞次郎先生古稀記念論文集刊行会
- (8) 柳沢一男 1984 「福岡市遠崎古墳の横穴式石室」『月刊考古学ジャーナル』No.238 ニューサイエンス社
1984 『遠崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集 福岡市教育委員会
1986 『九原山古墳Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集 福岡市教育委員会
1989 「四、古墳の変質」『古代を考える 古墳』白石太一郎編 吉川弘文館
- (9) 小田富士雄 1980 「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻 学生社
1986 「Ⅳ、古墳時代」『国説発掘が語る日本史』6九州・沖縄編 横山浩一編 新人物往来社
- (10) 藤原宏行 1983 「壱穴系横穴式石室考」『古墳文化の新視角』古墳文化研究会編 雄山閣
- (11) 上生田純之 1983 「九州の初期横穴式石室」『古文化談叢』第12集 九州古文化研究会
- (12) 森下浩行 1986 「日本における横穴式石室の出現とその系譜—畿内型と九州型」『古代学研究』第111号 古代学研究会
1987 「九州型横穴式石室考—畿内型出現前・横穴式石室の様相—」『古代学研究』第115号 古代学研究会
- (13) 林日佐子 1982 「日本と朝鮮における壱穴系横穴式石室」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅡ 森浩一編 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- (14) 小田富士雄 1966 『Ⅲ、古墳文化の地域的特色 2. 九州』『日本の考古学』Ⅳ古墳時代上 近藤義郎・藤沢長治編 河出書房
- (15) 渡邊の概念は後述する。

- (16) 後で述べる北部九州型石室A類については、筑前地方だけでは資料数が不足するので、周辺地域のものも含んでいる。
- (17) 溝口孝司はこのような方法に対して、最初に提起した田中良之を尊重し「田中の方法」と名付けたが、これは田中の意図を忠実に後継したものにのみ使用されるべきだと考える。本論では田中の意図からかなり逸脱しているような気がするので、あえて「田中の方法」とは呼ばない。
- 溝口孝司 1987 「土器における偶性伝播の研究—凹維文の発生と伝播—」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生追宮記念論文集』中 同朋社出版
- 田中良之 1982 「磨治縄文土器伝播のプロセス—中九州を中心として—」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上 森貞次郎先生古稀記念論文集刊行会
- (18) 註13に同じ。
- (19) 註7に同じ。
- (20) 大形古墳と小形古墳の石室を比較すると、大きさはもちろん違うが、初期の段階では大形古墳のものは極端に玄室高が高い。また、大形古墳には複室、小形古墳には単室が多い。
- (21) 山中英彦と児玉真一は、先行する堅穴式石室をいくつかの階層に分類し、それが堅穴系横口式石室に継承されると指摘している。
- 山中英彦 1974 『東宮ノ尾古墳群』北九州市教育委員会
- 児玉真一 1980 『若宮・宮田工業団地関連埋蔵文化財調査報告書』第3集 福岡県教育委員会
- (22) 註10、12に同じ。
- (23) 土生田純之 1988 「古墳と土器」『季刊考古学』第24号 隼山閣

報告書一覧

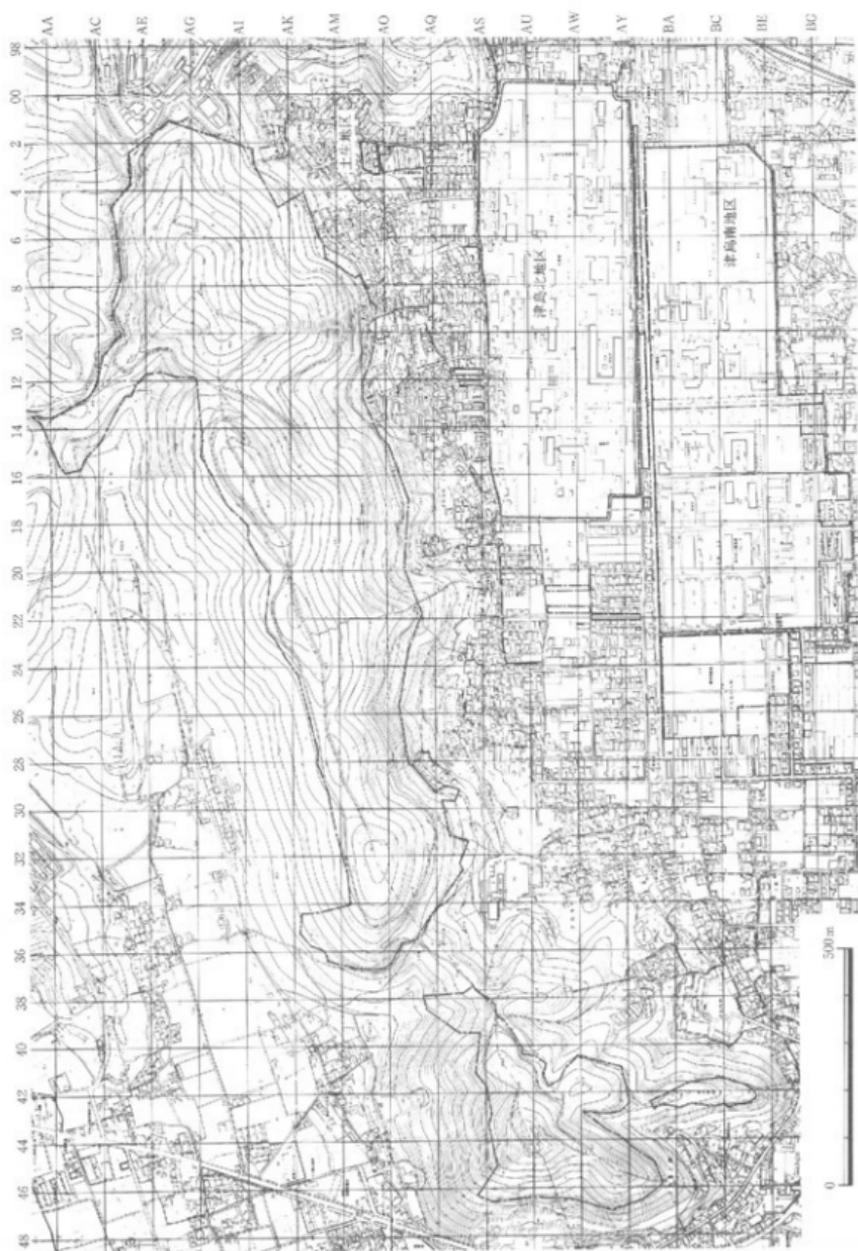
- | | | | |
|-------------|--------------------|----------|------|
| 1 『龜崎古墳』 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集 | 福岡市教育委員会 | 1984 |
| 2 『九隈山古墳Ⅱ』 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集 | 福岡市教育委員会 | 1986 |
| 3 『釜塚』 | 前原町文化財調査報告書第4集 | 前原町教育委員会 | 1981 |
| 4 『浦谷古墳群Ⅰ』 | 宗像市文化財調査報告書第5集 | 宗像市教育委員会 | 1982 |
| 5 『宇美観音浦』 | | 宇美町教育委員会 | 1981 |
| 6 『相原古墳群』 | 宗像町文化財調査報告書第1集 | 宗像町教育委員会 | 1979 |
| 7 『城ヶ谷古墳群Ⅱ』 | 宗像市文化財調査報告書第8集 | 宗像市教育委員会 | 1985 |

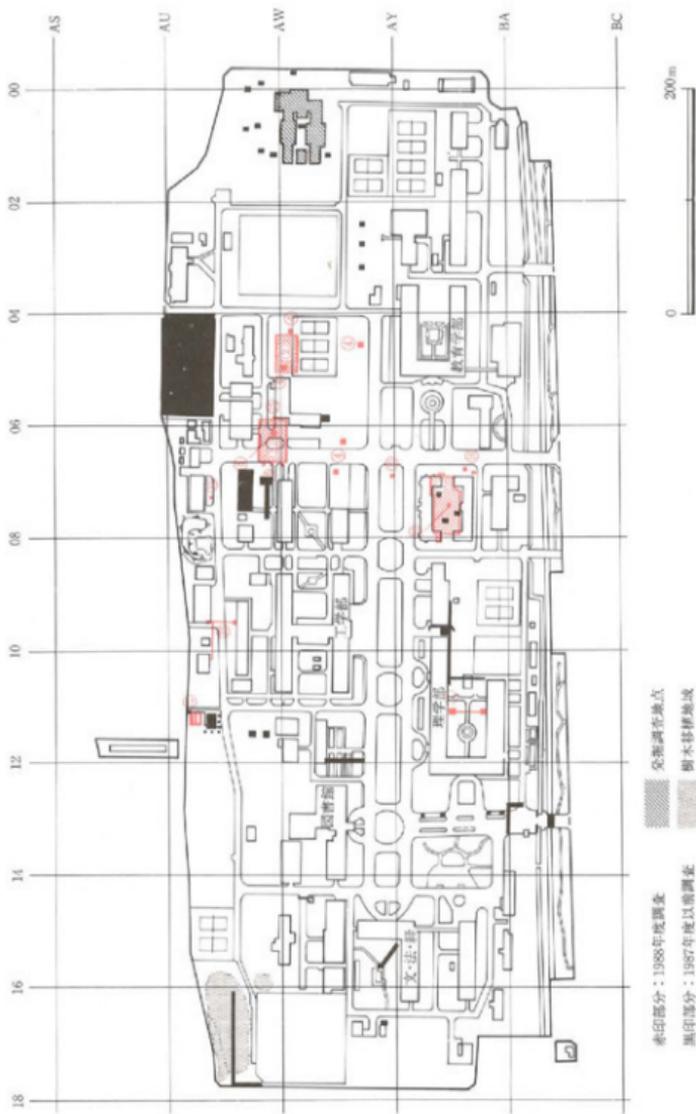
追記

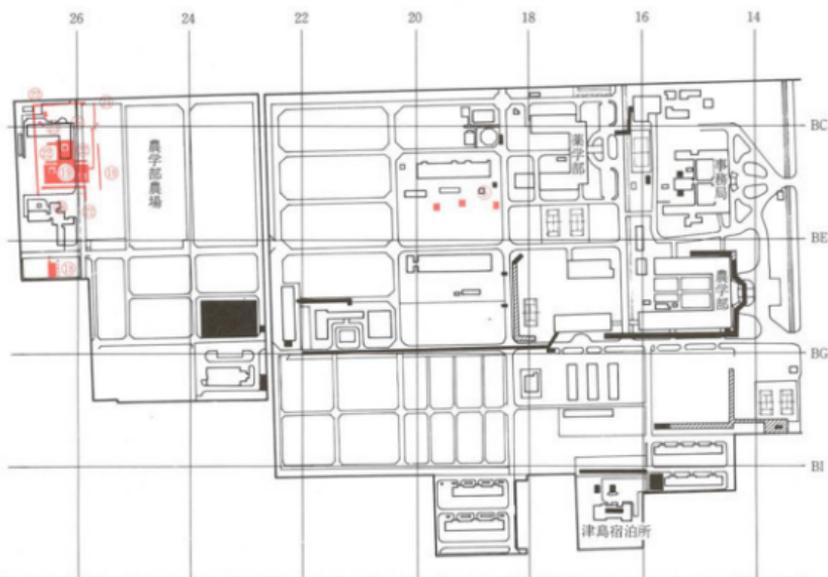
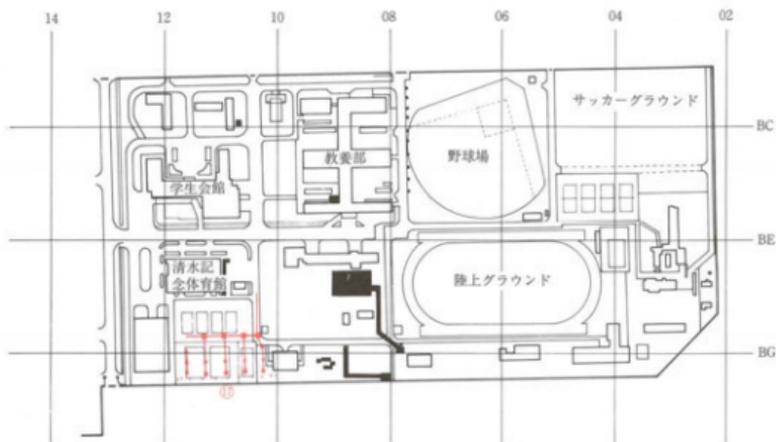
校正段階で老河古墳の報告書入手することができたが、時間的余裕もないので、別の機会に検討したい。

『老河古墳』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 福岡市教育委員会 1989

図版一 津島地区全体図(縮尺1/12000)







赤印部分：1988年度調査

■ 発掘調査地点

黒印部分：1987年度以前調査

0 200m



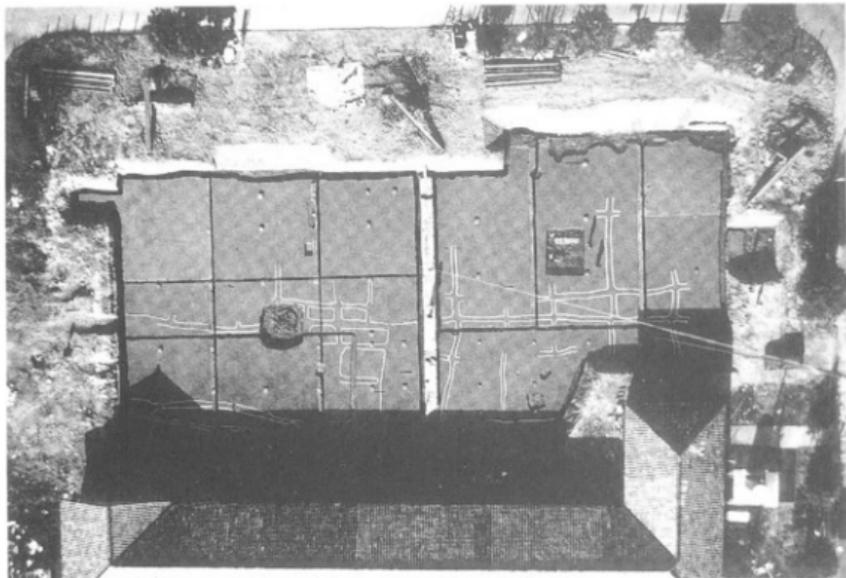
赤色部分：1988年度調査

■ 発掘調査地点

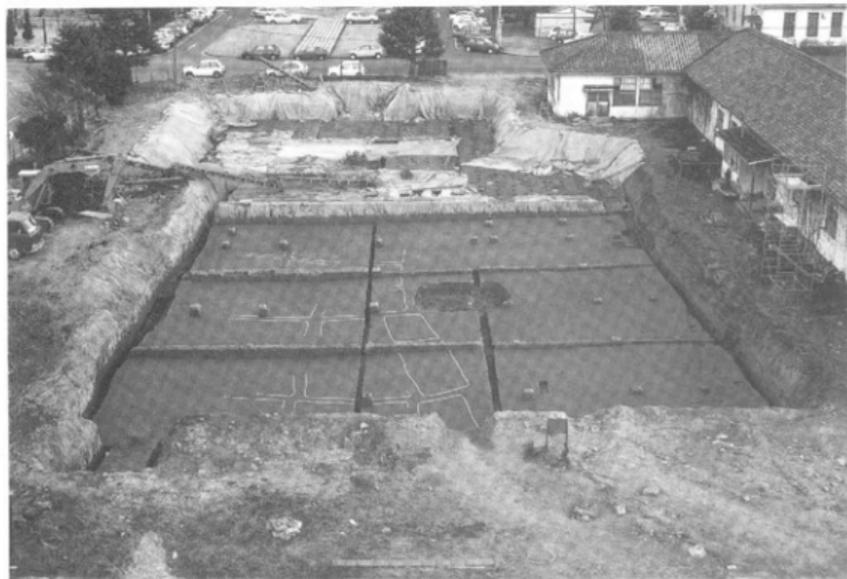
黒色部分：1987年度以前調査

■ 樹木移植地域





1 7層上面弥生時代水田検出状況（気球写真 上が北）



2 8層上面西半部弥生時代水田検出状況（西から）



1 縄文時代後期貯蔵穴群検出状況（東から）



2 貯蔵穴2（東から）



1 貯蔵穴1（北から）



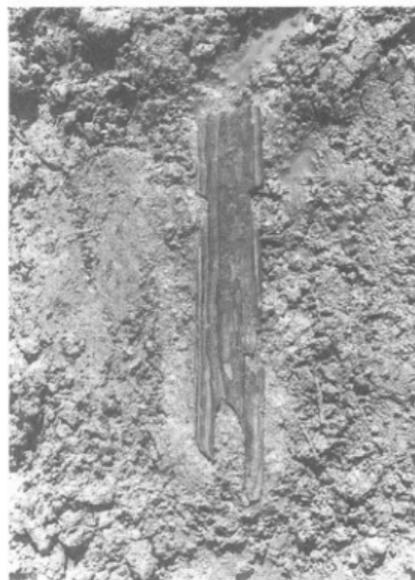
2 出土遺物



1 古代溝完掘状況（東から）



2 古代溝杭出土状況（北から）



3 古代溝木器出土状況（西から）



1 9層上面水田遺構検出状況（南から）



2 10層上面水田遺構検出状況（東から）



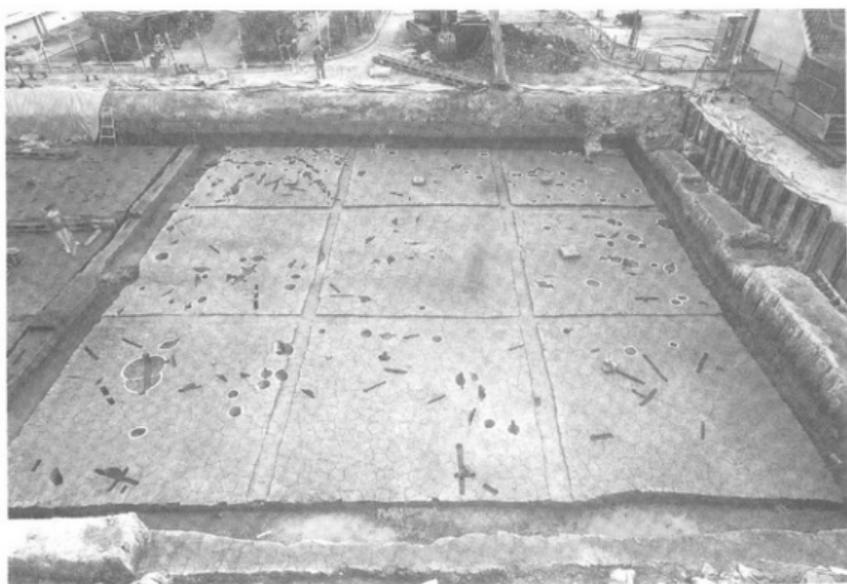
1 11層上面弥生時代水田検出状況（南から）



2 1号炉址（北から）



1 13層上面縄文時代遺構検出状況（調査区東側，北から）



2 13層上面縄文時代遺構検出状況（調査区西側，北から）

1989年10月14日 印刷

1989年10月14日 発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報 6 1988年度

編集	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
発行	岡山市津高中3丁目2番1号 (0862)52-1111 (内線246)
印刷	サンコー印刷株式会社 総社市真壁871-2 (08669)3-2121(代)